
夜空

usa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜空

【著者名】

NZマーク

NZ3831-X

【作者名】

us a

【あらすじ】

夜空の星のよつて、たくさんのお話を……。

恋愛多めの短編集です。

リクエスト受付中

ちらりと覗いてみてください。

作者よつ

こんにちは、us aです

この度、短編集を書くことにしました。

そこで、この小説の内容について、少し説明を…。

皆様暫し、お付き合い願います。

まず、書くものは大体原作通りのカップリングの恋愛ものです。

(新蘭、平和、高佐、または快青)

時々恋愛じゃないものも書きますが、基本これです。

え～…リクエストも受け付けますが、原作カップリング以外のものはお控えください。

(今哀、新哀、新志、BL、GL)

リクエスト受けてから、下書きなどもあるので、だいたい一週間から二週間ほどかかる恐れがあります。

ご了承ください。

気ままなカメ更新です。

田こちが空くかもしませんが、催促などはおやめ下さい。

それでは、次話から本編スタートです。

どうぞ、『覗ください』へ（――）へ

めじめつの「love」(前書き)

With 02 から の リクエスト。

組織 壊滅 一ヶ月 後 の 設定。

新
蘭

「いってえ～～」

「自業自得よ。はい、終わり！」

赤く腫れた新一の頬に、蘭はやや乱暴に絆創膏を張る。

「いてつ」「いてつ」

「大体、しばらくの間は大人しくね、って哀ちゃんに言われてたじゃない！それで事件に行つて怪我して…子供じゃないんだから、やめてよね！」

「へいへい、仰せのとおりですよ」

いじけた様に言つ新一の頬を、蘭は引っ張った。

「少しばかり反省しなさい！」

「ひや、ひやい・・・」

蘭は救急箱をしまつと、自分のカバンを持って帰る支度を始めた。

「それじゃあね。ジッとしてよ」

「あ、も、もう帰んのか？」

「… わよなうー。」

蘭は勢いよくドアを開めて去つていく。

新一はソファに座ると、ため息をついた。

そして、手の中にあつたものをテーブルに置くと、髪をかきむしつた。

「あー…クソッ」

ジャラツと音がしたそれは、片方だけの天使の羽根のようなものがついたネックレスだつた。

「組織を倒して一ヶ月。せつかく元の身体に戻つて彼女と再会できただけど、告白の返事も聞けないし、かといって自分から聞くのも恥ずかしいし、おまけにずいぶん前から買つていたそのネックレスも渡せない…ってところかしら？」

「うわっ！？」

突然考えていたことをいい当てられ、新一はソファからずり落ちる。

「は、灰原！」

「はい、これ今日の分」

オーバーリアクションの新一を前に、哀は無表情のままテーブルにトンと錠剤の入つたケースをおく。

「あ、ああ。ありがとな」

新一は座りなおすと、ネックレスをしまい、ケースを見つめた。

「また事件に行つてたそりゃない？私の忠告も聞かずに」「わ、わりいな」

「別に私は構わないわよ。あなたに自殺願望があるんならね」

新一は苦笑を浮かべた。

「今まで飲みやいーんだよ。」の栄養剤

「解毒剤を服用して一ヶ月…あと一週間よ

新一が栄養剤を恨めしそうに突いているのを見て、哀は言った。

「ハツ当たりしないでくれる？あなたの恋愛事情と私の薬は全く関係ないわ。解毒剤の副作用が体力の低下だけですんだのもラッキーだし、むしろ感謝してほしいぐらいだわ」

「べ、別にハツ当たりなんかじやねえよ

それでもブスッとした顔の新一。

哀はため息をついた。

「そういえば、今彼女とすれ違った時…」

「あん？」

「新出先生の所に行くつて言つてたわ。すゞくうれしそうにな」「何つ…？」

新一が勢いよく立ちあがると、テーブルの上のケースもぐらつと揺れた。

「…無理をしない程度にね」

「おつ…」

その言葉を聞いているのがどうかは定かではないが、新一は玄関に走り出すと、蘭に負けず劣らずの強い力でドアを閉めた。

「世話のやける人ね…」

哀はそう言つと、欠伸をしてソファに腰掛けた。

「蘭！」

とりあえず外に出で名前を呼ぶ。

まだそう遠くにはいっていないはず。

蘭の方を探してみるが、その姿は見えない。

仕方なく新出先生の所に行つてみようと方向を変えた。

だが、解毒剤の所為か、ひどく体がだるく疲れている。

それでも走りうと足を動かした。

なんとか歩きだしたが、息が切れる。

これでは探しに行けそうにない、と思つていいのと…

「新一？」

今まさに探していた人物が目の前に。

だが一人ではない。

「大丈夫？ 汗びっしょりだよ」

「すぐにお家に行つて手当てしないと」と
と言つて、新出が新一の額に手を伸ばす。

新一はその手を制すると、ゆっくり後ずさつた。

「平氣だ…。すぐ、帰つから、よ…」

一步後ろに踏み出した瞬間、足がガクッと崩れた。

「39度6分…。無理しない程度に、って言つたはずよ?」
「すいませんねえ…」

体温計を見つめ、冷たい視線を向けてくる涼子に、新一は投げやりな口調で言つた。

すると、ドアをノックする音が聞こえた。

哀がどうぞ、と返事をすると、蘭が入ってきた。

「し、失礼しまーす……」

反対に哀が出てこぐ。

「これ、お粥なんだけど…食べれる?」

新一が返事をしないと、蘭はベッドの傍にお粥をおこした。

「ちやんと食べてね?」

「…オレのことはここから、わざわざと行けよ」

「は?」

蘭が間抜けな声を出すと、新一は布団にもぐりこんだ。

「新出先生の所…。会いに行つてたんだる?」

「ああ…そのこと?」

「お前ね…早く言えよな

「何を?」

新一は目だけを出して、蘭をジト目で見る。

「好きなんだろ?新出先生が…」

「…はい?」

「そ、それならひとつ、オレにも言えつつの。知つたらオレだつて…」

オレだつて…。

続けて言おうとしたが、その前に蘭の笑い声が聞こえた。

「バカじやないの。アンタ」

「ハア！？」

いきなりバカと言われ、新一は跳ね起きた。

「確かに新出先生に会いに行つたけど…それはちよつと相談に乗つてもらつただけよ」

「相談？」

「そう。幼馴染の推理バカの調子がおかしいから、どうしたら元気になれるか、って」

それを聞くと、新一はガクツと肩の力を抜いた。

「えつ？どうしたの？」

「なんでもねえよ…。ちょっと自分が情けなくなつただけだ」

蘭はそつと新一に近寄ると、額に手を伸ばした。

だが、その手をグイッと掴まれ、新一に抱きしめられるような形になつた。

「ちょ、ちょっと…」

「お前は、オレの傍にいろよ」

胸元で微かな音がして、蘭はそこを見た。

「わあ…」

「そ、それもつとけ！」

新一は再びベッドに潜り込む。

「ありがとう、新一」

蘭はネックレスを見つめた。

「でも変な形ね…。何なの、これ？」

「…知るかよッ」

それがふたつに割れたハートであり、もう片方を新一が持っていることを蘭が知るのは、もう少し先のおはなし。

はじめてのLoVe（後書き）

次回は快晴、かな

見て下さい

黙つ姫（前書き）

快晴。否、キ青？

恋愛要素、やや少なめ・・・。

眠り姫

「待て——シッ キッド———！」

(へへひ、ひょろこちゅうこ)

手中にある大きな紫色の宝石のついたネックレスを見て、黒羽快斗、否、怪盗キッドはほくそ笑む。

今日も屋上に行き、そこからダミーを飛ばして警官にまぎれて逃げる予定だった。

後ろから中森警部率いる警官が大勢いるが、キッドは余裕の笑みを浮かべて彼らを捲き、さっさと屋上につく。

月明かりに向かい、ビッグジュエルをかざしてみる。

結果は…

「シロ、か…」

仕方ないか、とため息をつき、宝石をしまおうとした。

だが…

「見つけたわよ、怪盗キッド！」

突如大声がして振り返る。

(ゲッ)

「ああ、今日「ハマ」お父さんの前で、あなたを『あかつ』出してやるんだがりー。」

手錠を持ち、闘志に燃える幼馴染の姿に、さすがのキッドも顔をひきつり出す。

「こ、いけませんよ、お嬢さん。そのような物騒なものをお持ちになつては…」

辛うじてやう言つたが、青子は構わずじりじりと距離を縮めてくる。

「なんともおしゃべりが…」

不意に青子がキッドの腕を掴んだ。

ガチャーンと音がし、見事手錠がキッドの手首に。

「やつたあーー！」

無邪気に喜ぶ青子だが、キッドは心の中で謝った。

(「メンな、青子）

「私もお嬢さんとおしゃべりすることができるのは誠に光栄ですが・

・・そろそろお子様は眠るお時間ですよ」

「な・・・つ。あ、青子、お子様じゃないもんー！」

挑発に乗り、振り返る青子に、キッドは催眠スプレーをかけた。

「おひと」

青子が倒れる前に、キッドは青子を支え、そつと地面に横たわらせた。

そしてその首に盗んだ宝石をかけた。

「じやな、青子」

「キッズ…………！」

バーン！という派手な音とともに、中森警部のお出まし。

「おや、遅かったですね、中森警部」

「何イ！？」

「あなたの眠り姫が、ここでお待ちだところに……」

さりげなく青子に手をやると、中森警部の顔色が変わった。

「あ、青子！？」

「シーツ。姫が起きてしましますよ」

キッドは人差し指を唇にあてた。

「さて、姫が目覚める前に、私は退散するとしましょう」

突然あたりが眩しく光り、周りから警官の焦った声が聞こえてきた。

やがて視界が開けると、やはりそこにはすでにキッドの姿はなく…。

「に、逃がすな！追え――っ！」

中森警部の企図とともに、大勢の警官が走り出す。

その中にまわらひで、キッドが変装した偽警官も混じつてゐるわけ
で…。

今日も怪盗キッドは見事に逃げたのだとや。

翌日、青子にキッドのことを散々悪く言われたことは、いつまでも
ない…。

「青子、お子様じゃないもん！」

はこはこ…。

眠り姫（後書き）

一応リクエスト作です。

こんなんでよろしかったんでしょうか・・・？

次回は平和

ポニー・テール（前書き）

幼少期の平和。

作者の妄想満載（笑）

ポニー・テール

「ねえ、和葉ちゃんって、どうしていつもポニー・テールなの？」

久しぶりに会う東京の友人にたずねられ、和葉は戸惑つ。

「ど、どうして、って言われても…」

「確かに、それだけ長ければ色々ヘアアレンジできるのに、いつもポニー・テールにリボンだよね？」

蘭の問いに便乗し、園子も言つた。

「べ、別に深い意味はあらへんよ」

「あっ。その顔は服部君絡みね！」

「どーせ、“和葉はその馬の尻尾が一番似合つんや”とか言われたんでしょ？」

「そ、そんなんぢやうよッ」

和葉が即否定すると、2人はニヤッと笑つた。

「ふう〜ん。それならどんな理由なの？」

「え、えと…」

「いいじゃない。教えてよ！」

園子がメモを取り出しかねない勢いで迫る。

蘭も隣で興味心身な表情。

「あ……あれは……」

和葉は思い出していた。

あの幼ごろの、甘酸っぱい一時を。

「おれいでかずは」
「へいじがはやこんよー」

れつわと走り出す平次を、和葉は髪の毛を抑えつつ追いかける。

「うわっ。おまえのかみ、ジャマや」
「や、そんなんいつても…」
「ジャマにならんよつおそれとけー!」
「あつ。へいじー」

まだ下るしていた和葉の長い髪が風になびき…平次の顔に当たった。
いつものように公園を走り回っていた。

2人がまだ三歳ぐらいの時。
あれはやつ。

「かずはあー。じゅわわわわわー」
「へいじ、まつてやー。」

それを聞くと、平次は少しスピードを緩めた。

やがて和葉が追い付くと、平次は木を指差した。

「みてみ、かずは。あのき、うえのほつになにかひつかつてんで
「えつ？なになに？」

和葉は背伸びをし、平次が差すものを見ようとした。

「ちよっとのぼってとっつきよか」「
や、やめたほうがええんとちやうへ。
「なんでや？」

平次はキヨトンとした目で和葉を見返すと、スルスルと木を上つていぐ。

「へ、へいじい！」

慌てて追いかけようとしたが、頭の方に鈍い痛みを感じた。

「いたつ・・・」

思わず声をあげ、その方を見た。

毛先が近くにあつた別の木の枝に引っかかっている。

上方から平次の声が振つてくる。

「どないした～？」

「か、かみがひつかかつてもうた…」

「ハア！？」

平次は急いで降りてくると、和葉の髪を引っ張った。

「い、いたいわっ」

「しゃ、しゃーないやん」

「もうこんなかみ、きつたるー。」

和葉がそう言つて、自分の髪を掴んだ。

だが、

「アカン！」

平次が突然大声を出し、和葉の手を止める。

「へいじ…？」

「お、おまえはアホやから、かみぐらこはだいじにせんと、なんも
なくなつてまうやん。じつとじとけー。」

平次はぶつきりぱりぱりと、和葉の髪を丁寧に木から離そうとした。

「ほりー！とれたでー！」

「よ、よかつたわ…」

和葉がホッとしたような表情をすると、平次はゴソゴソとポケット
から何かを取り出した。

「これ、いまきこひつかかうとつやつやけだ……」

後ろを向くと、平次は和葉の髪に何かをしつらえた。

「なんなん、これ？」

「これでオッケーやー！」

平次は満足げに言つて、ニカツと笑つた。

「これならかみ、ジャマにならへんやう？」

「えつ？ わあ……」

和葉はリボンでポニー テールに結わえられた髪に触れ、嬉しそうに笑う。

「おおきにな、平次！」

この口から、リボンとポニー テールは和葉のトレーデマーク。

「和葉ちゃん」

「へ？」

名前を呼ばれ、たつた今漫つていた思い出の世界から戻つてくる。

「今何考えてたのよ?」

園子がニヤツとして和葉を小突く。

「な、何でもあらへん」

「またまたあ。照れちゃつて」

蘭も和葉の頬をつつく。

「さあ、何考えてたか、吐きなさい!」

「こーやーやー!」

因みに、平次がくれたりボンは、今でも和葉のお守りの中に…。

ポニー・テール（後書き）

以上、usaの妄想でした（#^.^#）

本当に平次君がこんな事をするかとか、偶然木にリボンがひつかかるかと思った方もいらっしゃるかと思いますが、どうか、ご勘弁を

>（—_—）<

次は何かな〜。

原者？（前書き）

オリキヤラ登場。

新
蘭

勇者？

「オレと付き合つて下せこー。」

「『めんなさこ』」

告白してからおよそ〇・五秒で振られた男子生徒。

でももう慣れた。

何せ、これが87回目の告白。

だがここまで来てもめげないとは、この生徒はある意味勇者かもしれない。

田の前に立てる彼女は、さすがに迷惑そうな顔をしている。

「須藤君、知つてゐると思つけど、私…」

「工藤のことなら確かに知つてゐる。でも、オレが毛利に告るのはいいだろ?」

男子生徒、須藤光輝は憲りる様子もなく笑つてゐる。

「でも、私は須藤君とは付き合へないよ」

彼女、毛利蘭はさつと部活に戻る。

「またダメか…」

一人になると、光輝はため息をついた。

三か月ほど前に転校してきた彼が、こうして毎日蘭に告白をしているのには、ある理由があった。

「ちきしょ・・・」

ここは空手関東大会会場。

光輝はそこで座りこんでいた。

「今ので勝てれば決勝だったのに...」

彼は先程、準決勝に敗れたばかりだった。

その前の試合で右膝に怪我を負つたことが直接の原因だった。

「次こそは...」

と言つて、光輝は立ち上がるつとしたが、傷が痛み、またうずくまつた。

「つてえ」

「あの...大丈夫ですか?」

突然上から声がして、光輝は顔を上げる。

「傷、冷やした方がいいですよ」

そう言つて蘭は、光輝に保冷剤を差し出した。

そしてこの瞬間、光輝は命を助けてくれた人魚姫の歌声に心を奪われる王子の如く、保冷剤を差し出す空手の凄腕の少女に恋をしたのだ。

「ちえつ。いつも工藤工藤つて……」

光輝はぶつくさ言いながら帰路についていた。

「あの推理やるーのどこが……」

言いかけて光輝は口を開いたまま立ち止った。

そりや、好きな女の子の恋人が別の女性と歩いていたら、そうなるのも無理はない。

「あのやろオ」

声をかけてムードを台無しにしてやるつかと思ったが、光輝はこうえて2人の姿を写真に収めた。

「……」れで毛利はもらつたぜ」

「昨日も言つたと思つたが……」
「工藤だろ？ まあ、これを見てから考えてよ」

何も言わないまま振られ、たすがの光輝もじょぎる。

「毛利～」「
「～めんなさい」
「な……つ。お、オレ、まだなんも言つてねーんだけど……」

そう言つと、光輝は昨日の写真を蘭に見せた。

一瞬、蘭は大きく目を見開き、固まつた。

「アソッ、最低だよなー。毛利みたいな美人の彼女がいるくせに、他の女と…」

「さよなら」

「えつ？」

蘭はそのまま教室に向かおうとする。

「ちょ、ちょっと、毛利？」

「どうもありがと、須藤君」

嫌な予感がした。

そして、その予感は当たつた。

数分後、帝丹高校にだけ、強大な雷が落ちてきた。

「ふあ・・・」

欠伸をしながら歩き続ける。

あのあと、様々な生徒が見守る中、蘭と新一の大喧嘩が始まった。最終的に、蘭の大っキライ!…という声で終わつたが、そのあと二人はどうなつたのやら…。

ことの元凶を作つたのは自分だけに、多少は気になる。

だが、ちらつと覗いた喫茶店で、その考えは一気に吹き飛ぶ。

「アイツ…」

新一と一緒にいたのは、昨日と同じ女性だった。

顔は見えないが、肩を震わせているため泣いているのがわかる。

それを新一が笑顔で慰め、手を握つている……というような感じだ。

やがて2人が店から出てきたため、光輝は咄嗟に隠れた。

「大丈夫ですよ」

「で、でも…」

「僕がつこてますか？」

「ぶりから察するに、女性の方が年上のよう。

「ゴメンね、私のために…」

「いや、気にしないでください」

新一は他に何か言おうとしたが、その前に誰かが来た。

「…え？」

お互に堅い表情で頭を下げる。

相手の男は女性に向ける。

「…」んな探偵を雇つて… オレの「」とを調べさせたのか？」

…は？

探偵？

雇つた？

「あ、あなたが別の女と会つて居るのは、薄々気づいてました。だから、彼にお願いして…」

と、女性が小さな声で言った。

話を聞いていた元に、何となく理解ができてきた。

これはただの浮気調査かなんかで、女性は雇い主だったのだ。

「いいわけはあとでいい。帰るぞ」

「い…いや、です」

「とにかく、オレと一緒に帰るんだ！」

男は女性の手を掴もうとしたが、寸前で止められた。

「嫌がってるじゃないですか。やめてください！」

「も…毛利？」

蘭はジッと男を見つめていた。

「お、お前…」

新一も突然現れた蘭を見て、口をパクパクとさせている。

「なんだ、お前は？」

「ただの通りすがりの通行人です」

嘘だ、と光輝は思った。

蘭は偶然来たんじゃない。

新一をつけてきたのだ。

さつき大嫌いだと言つた男を。

「関係ないだろ」

「…いい加減にしないと」

あ、ヤバい、と思った時にはもう遅く、男は蘭に蹴つ飛ばされていた。

「なつ、何すんだよッ」

男は叫ぶと、蘭に蹴られたらしく頭を押された。

当の蘭は涼しい顔。

男はそれを見てカツとしたらしく、こきなりこちらに向かって走ってきた。

「えつ？」

咄嗟のこととで蘭はよけずにはのると、腕に熱さを感じた。

「いっ・・・」

そこを見ると、何かで引っ搔いたような傷ができる。

女性が悲鳴を上げた。

男はカッターナイフを手に、息を荒げていた。

「女のくせに、男を口にしゃがつて…」

やつぱりと、もう一度カッターを蘭に向ける。

危ない。

そう思つた光輝の身体は自然と前へ動く。

「うああああツツ！」

「な、なんだ？」

そのまま格好良く相手に体当たりし、カッターを奪つて彼女を助けるか…と思ひきや、その手前にあつた石ですつてんころりん。

なんとも情けない勇者だ。

だがこのおかげで男に隙ができ、新一は無事に男をとらえた。

そして蘭はとすると、笑顔になつてまっすぐ光輝を……通り越し、愛しき恋人の胸に飛び込んだ。

「新一」

「蘭」

「ごめん。さつきは、その・・・」

「もういい」

新一も蘭を抱き締める。

「でも、疑つてたわけじゃないからね? ただ、ホントかどうかを確かめに…」

「わあつてるつて」

必死で弁解しようとする蘭を、新一は優しくなれる。

「ケガ、大丈夫か?」

「うん…」

「手当てるの？」

新一は蘭をおぶり、帰らつとした。

「あ、あのやー」

その後ろ姿に、光輝は遠慮がちに声をかける。

「…なんだよ?」

あ、知ってる。

「イツオレが毛利に言い寄つてたこと絶対知ってる。

光輝はひきつった笑みを浮かべつつ、口を開く。

「い、いやあ、まさかこんなことになるとはな…。でもまあ、毛利が無事で良かつたよ」

「お前が蘭に妙な写真を見せなければ、ケガなんてなかつたけどな

新一がぶつかりぼつと、光輝も渴いた笑い声を出す。

「そ、それは悪かったよ。じゃ、じゃあ、オレ帰るわ
「待つた」

慌てて帰らつとする光輝を新一は呼び止めめる。

「な…何?」

「先に行つとく。オレ、蘭と別れる氣ねえから」

そう言つて踵を返す新一。

それを見て、光輝はポツリと漏らす。

「…惚れたぜ」

「えつ？」

「だから蘭は…」

新一が振り返り、面倒臭そうに言おうとしたが、光輝はキラキラと目を輝かせた。

「自分の女を強く思つそのハート…男として惚れたぜ、工藤！」

「ハア！？」

「工藤！オレを弟子にしてくれ！」

「何でそつなんだよ…！」

…勇者は何事も諦めを知らない。

勇者？（後書き）

意味不明ですみません（汗）

とりあえずオリキャラを出したかったので…。

長々と失礼しました>（――）<

ブレスレット

「ハア…」

彼はため息をついていた。

理由は前を歩いている幼なじみの少女。ポニーテールを揺らしながら、無邪気に笑っている。

その愛らしい表情に目を奪われつつも、またため息をつく。

「なあ平次。これ可愛ええな！」

「えつ？あ、あ～」

(可愛ええ…かもな)

ブレスレットをひとつひとつと見つめる和葉。

そしてそんな和葉を見つめる平次。

「でも高いわあ。あたしのお小遣いじゃ無理やん」

値札を確認し、和葉は残念そうに言いつと、ブレスレットを元の位置に戻す。

「なんや、ええんか？」

平次が尋ねると、和葉も名残惜しそうにもう一度ブレスレットを見
る。

「だつてしゃーないやん。

これ買つてもうたら、今からお好み焼き食べれなくなりてしまう。

「そら昨日けつたいなストラップ買つとつたしなあ

平次が詰つと、和葉はムツとして言い返す。

「エリがけつたいやの！？ええやん別に

子供のようにムスッとする和葉を見て、平次は思わず笑つた。

「何が可笑しいの！？」

「お前のアホ面がヤバ

ムキになる和葉が可愛らしくて、平次はまた笑う。

「もうええわ！平次なんか知らん！」

終へて和葉はそれを書いて平次から顔を背けた。

「ガキやあるまいし、すねんなや」

だが和葉は仮頂面のまま。

そして何も言わずに雑貨屋を出た。

「お、おい、和葉！？」

平次も慌てて後を追おうとしたが、立ち止まって今和葉が見ていた
ブレスレットに目を向けた。

「あのブレスレット、欲しかったわあ……」

和葉はブツブツと言いながら、つま先で小石を蹴る。

「でも千六百円やし……。でも可愛ええし……」
「欲しいんやつたら欲しいって素直に言えや」

ジャラリと音がして、和葉は振り向いた。

「ほれ」
「へ、平次……」

驚く和葉に、平次は無言でブレスレットを差し出す。

「え、ええの？」
「いらんのなら返品してくんで」
「あつ。も、貰うー！」

和葉は平次からブレスレットを受け取ると、嬉しそうに手首に付けた。

「おおきに」、平次！

「あ、ああ…」

「お金いつか払うな！」

「そんなんええわ」

和葉が不思議そうな顔をした。

「ええの？」

「今日は特別やで」

ぶつかりぽつりな言い方とは逆に、少しだけ緩んだ表情。

「何二ヤケてんの？」

「に、ニヤけてなんかないわ！」

「なんか平次可笑しいで？」

「氣のせいや」

そう言つと、平次は先に歩き出した。

「ま、待つてえな！」

和葉も急いで追いかける。

この時、平次の耳が赤く染まっているのがチラッとだけ見えたそう
な。

フレスレット（後書き）

智田様リクエスト。

平和

甘さやや控えめ？

キスマードの距離（前書き）

新
蘭

付き合い始めて一ヶ月設定

キスまでの距離

「ハア…」

「ねえ

「ハア…」

「ちょっと…！」

「ハア…」

「…聞いてるの…？」

耳元で叫ばれ、新一は我に返る。

「うわっ」

「何よ、ため息ぱっかりついてると思つたら人の顔見て驚いたやつて…。そんなに私といたくないわけ？」

蘭は面白くなさをせりに頬を膨らませている。

「い、いや、ちょっとと考え事を…」

「どうせ事件でしょ？恋人との時間よりも事件が大事な冷たい探偵さん…」

「ま、まだ怒つてんのか、この間の土曜の…」

ツンと顔をそむけている蘭を見て、新一は言った。

「べつにイ

蘭は素っ気ない。

「これならわざわざトークをすっぽかしてまで事件に行くんじゃなかつたと、今更ながら後悔。」

とはいって、彼はこの事で悩んでいたわけではない。

2人が交際を始めて早一ヶ月。

だが相変わらず奥手な二人は、未だ手ぐらいしか握ったことがなく……。

それは幼馴染の頃もやっていたわけで、唯一恋人らしいことといえば、休日に出かけることが多くなった程度。

おまけに毎度毎度事件が起こり、愛しき名探偵はそちらへ……。

最初は笑って送り出してくれていた蘭も、次第に冷たくなり、現在に至る。

「ら、蘭」

「…何よ?」

蘭の態度に、一瞬新一もたじろぐ。

「そ、その、悪かったって…」

「……」

「埋め合わせに、前に蘭が観たいって言ってた映画、行こうぜ」

それを聞くと、蘭も少しだけ表情を和らげる。

「全部新一のおじいね?」

「えつ?...た、はい...」

だが名探偵に休日はない。

映画館に辿り着く前に、強盗、引ったくりなどの事件が起きたため、せつかく元に戻った蘭の機嫌も再び険悪に。

ようやく映画館に着くと、チケットに飲み物、ポップコーン、パンフレット、さらにはストラップやら下敷きやらファイルやらも買わされ、やっと劇場内に入る。

それらの荷物を持たされたまま席に座ると、すでに映画は始まっていた。

蘭がチラッと非難の眼差しを向ける。

だがこんな所で言い争うわけにもいかず、静かに椅子に座り、観賞を始める。

観賞開始15分後、すでに新一は欠伸を繰り返していた。

そりや、少女漫画をベースにしたラブロマンスを、男子高生が楽しそつに観るのは無理もあるのだが。

けれどもこれも蘭のため、と必死で目を開けている。

それでも睡魔に襲われて、ついにガクッと首を垂れた。

すると、急に肩の方が重くなり、気になつてそひひ田に向かた。

見れば、蘭が新一の肩に頭を乗せ寝息を立ててゐる。

疲れさせちまつたか…と呴いて、新一は蘭の髪を撫でた。

蘭は少しうつなつたが、起きる様子はない。

そのあざけない寝顔を見てこらへり、この間の考え方事を思い出す。

そひひ田。

蘭なら寝ている。

皆映画の方に夢中で、こらへりに注意を向ける者もいない。

今なら別に大丈夫だが…。

それでいいのだろうか？

田を覚まして、そのことを蘭が覚えていなかつたらショックだし…。

理性と欲の間で葛藤をしつつも、新一は蘭を見つめていた。

そして、つい顔を少しだけ近付ける。

もうじきまでくると、理性も何もなくなつてしまつのが、男。

蘭の寝息がかかるほど近くまで顔をよせた。

仕方ない……と、田をつづぶりとした、その時。

「ふあ……」

珍しく蘭が自ら皿を覚ました。

「…何してんの？」

「いや…別に」

2人のキスまでの距離は、まだまだ遠いよつ。

新一の苦悩は続く。

キスまでの距離（後書き）

もしかしたら、 続きができるかもしません。

次回は哀れちゃんメイン！

あ、恋愛じやあつません（汗）

リクエストもよろしくです

イルカ（前書き）

今回はじめましてメインです

恋愛じゅありません(^ _ ^)

蘭ちゃんのあの顔が出てきたあの事件の時です。

イルカ

可愛くて、賢くて、皆の人気者。

そう。

彼女はまるでイルカ。

それに比べたら私は…

誰からも好かれず、蔑まれている海の嫌われ者の鮫…。

私と彼女は大違い。

ご両親がいて、

親しい友人がたくさんいて、

好きな人がいて、

その人からも思われていて…。

皆彼女を好きにならずにはいられない。

何故…どうして…

彼女は私のような黒い過去を持つ人に、優しくしてくれるの…？

どんなに冷たい態度をとっても、あなたは私に笑顔を向ける。

その度に私の心は浄化されていく。

組織で毒薬を作り、たった一人の姉も殺され、裏切り者として怯える日々…。

そんな生活の中では、彼女は眩しそう。

彼女といふと、私が辛くなつてくれる。

聖水を浴びせられた悪魔のよつて、

苦しくて、落ち着かない……。

でも……逃げたくない。

“ 勇氣といつて言葉は、身を奮い立たせる正義の言葉”……ね。

彼女らしいわ。

私も……勇気を出すべきよね……？

「私の名前は灰原哀……よろしくね」

イルカ（後書き）

わかりにくいくらいと思った方々、すみませんでしたm(ーー)m

次回はオリキャラが出る予定です(^-^)v

恋愛小説（前書き）

オリキヤ「登場！」

「リサ」

- シンヘン -

頭の中で2つの声が響く。

ああ、今とつても素敵なストーリーが…。

——新——！

バチン！！

私の脳内でフワフワと漂っていたものが盛大な音をたてて一気に消えた。

「はい、タオル」
「おつ、サンキュー」

今いじところだつたのに！

なんなのよ、あの女！

せつかくいストーリーが浮かびそうだったのに……。

思わず私が机に突っ伏していると、携帯が鳴った。

“先生へ、今日中にお願いしますね！”

メールにはそれだけ書かれている。

私は深いため息をついた。

高校生にして私が先生と呼ばれているのにはわけがある。

私の正体は、何を隠そう今大人気の新人小説家、斎藤有紗さいとうありさ！

実は最近はスランプなんだけどね。

私の専門は恋愛で、大体は自分の想像をそのまま書いている。

えっ？相手は誰かつて？

そーんなの決まってんじやない！

私の心の彼は、あの名探偵、工藤新一！

いつも彼との恋を想像しながら小説を書いてるの。

そう。

あの女が出てくる前は…。

私がいつあの女とは、正真正銘上藤君の彼女、毛利蘭のこと。

可愛らしくて、女の子っぽくて、優しくて、友達思いで、強くて、
可愛いくせにカッコ良くて……。

なーんか、ムカつくぐらい完璧な子。

何もかもパーフェクトな上藤君とは本当にお似合いで、今は絶賛失恋中……。

おかげで仕事は進まないし、担当編集者に怒られるし、成績下がるし、寝不足になる……ふあ～あ。

「おはよう、莉紗子ちゃん（私の本名）」

…来た。

「はよ

わざと素っ気なく言ひなげ、毛利蘭はニコニコ笑っている。

「眠そうだね。大丈夫？」

「別に……」

こんな態度をとっているけど、私は決して彼女が嫌いなわけじゃない。

い。

普通に優しいし、いいヤツだから、憎みたくても憎めない。

現に私は、毛利蘭だからこそ、上藤君を諦めたようなもの。どうせかないつこないし。

いいんだ、これで。

私は帰り道、工藤君と毛利蘭を見かけた。

…会話、なさすぎだろ。

そう思つちゃう程、2人は静かだつた。

多分、原因はさつきの言い争いだ。

よくわからんけど、急に毛利蘭が怒鳴りだし、工藤君とケンカしあじめた。

園子が言うには、工藤君がずっと事件の話をしていることに腹を立てたらしい。

工藤君は何度も毛利蘭に向かって口を開きかけていたけど、毛利蘭はソソとして無視している。

でもやつぱり気になるみたいで目を工藤君に向け、目が合つとすぐ逸らし、そしてまた…

つて、なんだよこの超ベタな恋愛小説みたいな展開は！

私が一人突っ込んでいると、よつやく工藤君が言った。

「あ、あの… わ」

「…何よ」

毛利蘭の態度は冷たい。

「その……悪かつたよ」

「…………」

「まあ、お前が気にいらねえのはわかるよ。いつもオレ、事件ばつかだし。寂しい思いさせてんのに……事件の話とかしちまってよ……」

「……別に事件に行くことはいいの」

毛利蘭は前を見たまま言った。

「ただ、怖いだけ。新一がまたいなくなつちやつたら……って」

「蘭……」

工藤君が毛利蘭を抱き締めているのが見えた。

「ああ……今、いいストーリーが浮かんだ……。」

その時、また携帯が鳴った。

『先生！今日この書いてもらいますよーもつ何も浮かばないとか
は……』

「大丈夫です。書けます」

『えつ？』

斎藤有紗、人生初のミステリーに挑戦！

もちろん、主人公の探偵と幼なじみの恋人とのラブロマンスもたっぷりいれてね！

恋愛小説（後書き）

次回はキスまでの距離、続編！？

キスまでの距離 その2（前書き）

キスまでの距離、続編です

キスまでの距離 その2

「ここのはこうだる」

「えつ? な、なんで?」

「だからこの×が…」

蘭からノートを取り、新一はいつも簡単に数学の問題を解く。

「ほりよ

「あ…ホントだ」

どんな問題もスラスラ解いてしまつ名探偵に、蘭はため息をついた。

「いいわよねえ。誰かさんは、なーんにもしなくとも、テストなんか余裕だもんねえ」

「バーコ。オレだって多少の努力はしてんだよ」

「はいはい、多少ね、た・しょ・う…」

再びノートに向かうものの、あまり集中できない。

(顔…近い)

新一が前方から蘭の手元を覗き込んでいるため、2人の距離はかなり近い。

(そういえば…)

すっかり勉強から頭が逸れ、この間のノートのこと思い出す。

あの時新一は、眠っていた自分の田の前で何やら思いつめたような表情をしていた。

(なんだつたんだろ…)

「おい、蘭！」

「へ？」

名前を呼ばれ、慌てて顔を上げた。

その瞬間、お互いの顔がすぐ真正面にあって、蘭は思わず田を伏せた。

だが、新一は逆に蘭の顔を上げる。

「ち…ちよつと…」

「何寝てんだよ。お前が数学教えるって言つたんじやねえか」

それを聞くと、蘭はガクッと肩の力を抜いた。

「…どうかしたのか？」

「な、なんでもない…」

自分が考えていたことが恥ずかしくなってきた。

「あっ、や、キッチン借りるね

いびりくなり、蘭は立ち上がるとキッチンでコーヒーを淹に行つた。

「よしー」

自分に必死で言い聞かせ、頬を叩く。

「ハア…ダメダメー集中しなくちゃー！テストまで田にちがないんだから」

気合いをいれ、マグカップを持つて部屋に戻る。

「お待たせ」

だが返事はなく、不安になつて見てみると、新一は机に突つ伏していた。

「新一…寝てるの？」

試しに頬を突つついてみるが、起きる気配はない。

「何よ。私には寝るなって言つたのに」

憎まれ口を叩きながらも、綺麗な横顔にしばし見とれる。

「男の子のくせに、綺麗な顔…」

愛しそうが込み上げ、頭をそつとなでる。

「…今日はありがと」

小声で囁くと、新一の頬に軽く唇を当てる。

一瞬、新一が動いたような気がして、蘭は慌てて離れた。

けれど、新一は起きることなく目をつぶつたまま。

ホッと胸を撫で下ろし、また新一の寝顔を見つめた。

2人のキスまでの距離は、少しだけ縮まつた…かもしれない。

実はこの時、新一が起きていたことは、彼だけの秘密…。

キスまでの距離 その2（後書き）

実はめりやくひや照れてた新一君（笑）

リクエストまだ受け付け中です

よろしくお願ひします m(—_—)m

丘の館 リ&リナン（繪書）

何故かフツと浮かんだもの。

蘭ちゃんは「ナシ姫を立ててみたら、どんな結果に？」

占いの館 蔦&マナン

とある小さな占いの館にて…

わしは過去と未来を読み取る者。

この館には、様々な悩みを持つ人間が訪ねてくる。

その内、今日は2人紹介してみよう。

カラソカラソ

「誰じや？」

「も、毛利蘭といいます……」

ふむ。花のラソとな。

なかなか良いねじや。

「知り合いから、ijiのところがよく当たるって聞いてきたんですけど……」

「座りなされ」

この娘ぐらいの者は、大抵同じ悩みを抱えておる。

おそらく、この娘も……。

「何の悩みかね？」

「え、えつと……幼なじみのことなんですか……」

「幼なじみ？」

はて、めずらしへ。

「そいつ、今用事があつて、どつかに行つちやつたんですけど、時々しか帰つて来なくて、それで……」

なんじゅ。

結婚そんなことか。

「他の者が今どうして、おもしきらいの連つておるか…かな?」

「は、はいー」

恋愛に関する話題なのじゃが…仕方あるまい。

「…すぐ近づいや

「えつ~」

「他の者はおぬしのすぐ近くへ来る。おぬしも、少しは気付いておるのではないか?」

「は、はあ…」

来るかい。

わしが最も嫌いなあの質問が。

「あ、あのーその人は、私のこと…う、うつ connaît ここねとかね…」

…やはりな。

「そんなこと、わしが知らぬから。自分で聞きなされ

「で、ですよね…」

「わしが『うつ』とはもつ向ひてゐることなれど…」

恋愛となると、同じ質問をぶつけられる。

じやが、人の心はわしの口から聞くべきではない。

本人から直接聞くものじや。

カラカラ

ほお、子供…。

しかも男とはめずらしいの。

「…おぬし、何かとんでもない秘密を抱えてあるな」
「やう見える?」

まあ、良からず。

「おぬし、知は?」
「江戸川コナン」

面白こねじゅ。

じゃが嫌いではないぞ。

「…おぬしが探して求めているものは、次期見つかるじゃね。その仮の姿からも、戻れる」

「ふう…ん。そつか」

なかなか尻尾を出せんな。

「おぬしは少し自由奔放な所があるの。それのせいで大切なものを失いかけたことも。できるだけ早く、その者の近くに行きなされ。むやみに色々なことに首を突つ込みすぎて、抜けられんようじゃから、まずその性格を直すことじや。少し素直になる」とも学びなされ」

本当はもつとあるのじゃが…眞つとるときりがないのう。

「やう。ありがと、おばあさん」

「それともうひとつ。その大切なものの、早くせんと他の誰かに奪われてしまつだ」

うむ、この表情…。

やはり子供離れしておる。

なかなか面白い青年じゃったのう。

丘の館 藤&ヒナン（後書き）

その内別の人の占い結果を書いてみたいですね

キスまでの距離 その3（前書き）

キスまでの距離、更に続編。

鈴木財閥のパーティにて

キスまでの距離 その3

「ねえ、本当に私達も来て良かったの？」

著名人やセレブに囲まれ、蘭は戸惑つたよつて尋ねる。

「なーに言つてんのよー。あんたと新一君は、立派なうひの招待客だもん。堂々としてな、って」

園子はわざと言つて笑つた。

「で、旦那は？」

「だ、旦那じゃないわよー。」

慌てて否定するも、そうこえぱと辺りを見回した。

「あ、もしかして、あれじゃない？」

園子が指差す方を見ると、人だかりができていく。

女性ばかりで、時折甲高い声で「サイントモ」「だの「握手して下さい」だと叫んでいるのが聞こえてくる。

「有名人でしょ」

と、蘭は言ったが、園子は頑として

「いーえ。あれば新一君ねー」の推理クイーン園子様の口に狂いはないわ」

と黙こ張る。

苦笑しながらも、そこまで言わると『反』になる。

蘭も田を凝らして女性の中心を見つめた。

やがて、満足した女性達が散っていき、真ん中にいた人物の顔が見えてきた。

「あ…」

そこには愛しき名探偵の姿。

大勢のファン、それも女性に囲まれ、頬が緩んでいる。

「あやつ、蘭という妻がいながら…」

「妻じゃないわよー！」

ものすゞい剣幕で怒鳴られ、園子もビクッとした。

「や、そんなに怒んなくとも…」

そつと言つたが、蘭は聞いていない。

怒りに手をワナワナと震わせている。

園子もなだめるのは諦め、新一が素直に謝るのを祈つた。

やがてファンが全員いなくなり、新一が一歩前に戻ってきた。

「わりーわりー。囮まれちつてよ」

そう言いながらも、まんざらでもない表情。

鼻歌でも歌い出しそうだ。

「相変わらずモテモテです」と

と、園子が皮肉っぽく言つたが、新一は笑顔のまま。

なんだか気味が悪い。

「飲み物取りに行つてたんでしょう……？」

「え？ あ、ああ……」

いつになく低い声の蘭に、新一も一瞬たじろぐ。

「ふう……ん。そう。それだけでねえ……」

「ら、蘭。何か怒つてんのか？」

パリン！と音がして、蘭が持っていたグラスが粉々に砕け散った。

「う……蘭」

園子も顔を引きつらせた。

「だ、大丈夫かよ！」

新一は慌てて蘭の手を取り傷がないかどうか調べた。

「怪我はねえな……」

「もう…しょうがないわねえ。あたし、新しい飲み物取りに行つて
くるから」

だが、園子が行くまでもなかつた。

いきなり蘭はテーブルに置いてあつた新一のグラスを取つた。

そして、半分程残つていた中身を全て飲んでしまつた。

「「あ…」」

新一と園子の頭に同時に同じ言葉が浮かぶ。

“間接キス”

だがそのままロマンティックなムードに入れるわけもなく…。

バシッ！

「いつてえ！」

「さよなら！」

2人のキスまでの距離は、縮まつたかのように見せかけて、広まつた…。

キスまでの距離 その3（後書き）

せっかく間接キスまでいったのに…（Ｔ—Ｔ）

2人がキスできる口はくるのか！？

ジエラシーパーック（前書き）

智呂様リクエスト、平和

ジエラシーパーック

彼は非常にイライラしていた。

何故なのかは、彼の視線の先を見ていただければお分かりになると
思う。

そう。

彼は自分の恋人を見て、イライラしていたのだ。

いや、正確には恋人と話している男に対して、だが。
何はともあれ、自分の彼女が別の男と話していたら、おもしろいこ
とは何一つとしてない。

そんなこんなで、彼はイライラしていたのだった。

やがて彼女は男に手を振つて、こちらに戻ってきた。

「何の話してたんや？」

眉間にしわが寄るのを感じたが、元には戻せない。

「道教えとつただけやけど。平次、顔怖いで？」

そう言つて彼女は屈託のない笑顔を向ける。

その笑顔に、平次も一瞬頬を緩ませそうになるが、必死にこらえて先に歩きだす。

「あつ。平次、待つて！」

その後を急いで追いかけてくる和葉がなんとも可愛らしい。

それが嬉しくて、余計に早く歩く。

途中振り返っては、ポニー・テールを揺らしながら走っている和葉を見た。

付き合つてもう一年、二人は二十歳になるが、相変わらず平次は和葉だけ。

もちろん和葉も平次だけ。

「なあ平次。なんか怒つてんの？」

「別に」

「嘘やー…さつきからずつと顔しかめどんもん」

頬を膨らませる彼女が愛しくて、平次はよつやく笑う。

「何でもあらへんわ。気にすんな」

「…ならええけど」

平次は和葉に手を差し出した。

「いくで？」

「うん！」

嬉しそうに頷いて、和葉も手を握る。

「ど」「行くん?」「

「この間大滝はんに教えてもらたお好み焼屋とかどつや?」

「行く行く!」

平次が言つことすべてに色々な反応を示す彼女。

笑つたり、怒つたり、泣きそうな顔をしたり、やっぱり笑つたり。

「うわあ…めっちゃ混んでるやん」

「せやな」

大阪でも人気の店らしく、ちょいと毎時の今は長蛇の列ができていた。

「ちょっと店ん中見てくるわ。待つとき」

そう言つて平次は一人店の中へ。

店員にそれぐらい待つかをたずね、すぐに出た。

「おい和葉あ。一時間待ちやと…」

だがそこには彼女の姿はない。

「和葉?」

平次は辺りを見回した。

すると、店の脇で見知らぬ男を会話する和葉が。

「アイツは…」

半ば呆れながらも、和葉の方へ向かう。

「あつ、平次！」

「何してんねん？」

平次が頬をピクピクと痙攣させつつ聞くと、やはり和葉は笑顔のまま言った。

「このお店は入れそうにないから、別のお店のこじと聞ことったんよね？」

隣の男に同意を求める。

男は平次の出現に多少がっかりした表情をしながらも頷いた。

「そーかそーか。でも必要あらへんわ。いくぞ」

「ちよつと、平次い！」

無理矢理腕を引っ張られ、さすがに今度は不機嫌な顔になる和葉。

「なんなん？やつぱ怒つとるやん」

「そり怒るわ、ボケ！」

いきなり耳元で叫ばれ、和葉は耳を塞ぐ。

「お前は隙があつすやー。無闇に男に話しかけんなやー。」

「何で?」

和葉はキョトンとした顔で聞くが、平次は答えない。

いや、答えられない。

これはただの嫉妬だから。

「と…とにかくやー。お前はボケっとしとるから、すぐに男が寄つてく。でもお前は、オレの傍にだけ、おればええんやー。せやから…」

平次は何かを和葉に向かつて放り投げた。

「あ!」

和葉が慌ててキャッチする。

「や、それ、左手の…や、そこじゃつとけー。」

平次は顔を真っ赤にさせながら叫ぶ。

和葉はポカンとした表情のまま、とつあべず手の中の指輪を見た。

「もらつてええのん?」

「え、ええにきまつとるやない」

みると、和葉は花のような笑顔を見せた。

「おおおー、平次!」

その表情から、平次は自分の遠回しなプロポーズが通じなかつたことを感じ取る。

和葉が平次にプロポーズされたと理解したのは、家に帰り、父親にその指輪を見せた直後のこと。

ジエラシーパーツク（後書き）

鈍感和葉ちゃんにジエラシー平次君。

プロポーズ話でした

次回も見て下さい

秋祭り（前書き）

お祭りでのワソシーン。

快青

「トルコアイス? 何コレ?」

「あつ、あのクレープおいしそう!」

人が行き交うお祭りの会場の中、元気にはしゃぎまわる2人の少女の姿。

「わあ、見て見て蘭ちゃん! あのアイス、すっごい伸びてるよ!」

「ホントだ! すげー!」

青子はトルコアイスの屋台の前で興奮している。

その様子が嬉しいのか、トルコ人のおじさんは笑ってせりにアイスを伸ばした。

それを見てまた青子と蘭はキャッキャと声を上げる。

「ねえねえ、快斗! 快斗も見てみなよ」

と、青子はうしろを振り返つて快斗に言つたが、快斗は興味なさそうにしている。

「新一! 何でこのアイス伸びるのかな?」

と、蘭も新一に向かつて尋ねるが、新一は知るかと言わんばかりにため息をつく。

「何よーお祭り行こいつって言つたのは快斗のくせに」

青子はムスッとしながら言った。

「まあまあ。せっかくのデートなんだから、いいじゃない」「違うよ。快斗はある、学生半額のクレープが田当てだつただけ」

蘭の慰めの言葉も効果はない。

青子はつい先程快斗と共にに行つたクレープ屋を見た。

「今年は学生だけの特典があるって聞いたけど…それだつたんだ」

クレープを満足そうにほおばる快斗を、蘭も多少呆れながら眺める。

「蘭ちゃんも工藤君と行つてきなよ。いつまでも工藤君をバカイトにつき合わせるわけにいかないし」

「それなら大丈夫。どうせ新一はそこまで楽しんでないし」

それに…と、蘭は続ける。

「黒羽くんだつて、ホントは青子ちゃんと一緒に来たかっただけなんじゃない？ 照れ臭かつただけよ」

「や、そんなことないよ…」

そう言いながらも、少し青子の頬が緩む。

「あつちの方に行けば、屋台が少なくなつて、ほとんど一人つきりだよ」

蘭が提灯のやや少なくなつた暗い道を示す。

「う、うん…」

「頑張って、青子ちゃん」

蘭がそつと背中を押すと、青子は戸惑いながらも快斗の方へ行く。

「か、快斗…」

「ん~?」

快斗はクレープの残りを口に放り込む。

「あ、あつひ行ってみない?」

青子は蘭に言われた方の道を指差す。

「あつちつて何もねえだろ?..」

「い、いいからーほらー..」

半ば強引に快斗の腕を引っ張り、青子は暗い道へと行く。

「どうしたんだ?」

「いいじゃない。はい、私たちはこっち

蘭と新一は正反対の方へと消えて行った。

「どうかしたのか？」

先の方からお囃子の軽快なリズムが聞こえてくるが、ここはかなり静かだ。

蘭には申し訳ないが、後悔が押し寄せてくる。

止めておけばよかつたかも知れない。

「真っ暗じゃねえか
「そ……そうだね……」

突然快斗は言った。

「な、何が？」

「や……お祭りなのに妙に静かだからよ……」

「そ、それは……」

必死にいいわけを考える。

本当の「J」とは、ちょっと照れくさくて言ひにくい。

「ト、トルコアイス、食べたかった、かな……なんて」

「……は？」

快斗は呆れたように声を漏らした。

「んなことかよ」

「い、いいじゃない、別に」

思わず向きになると、快斗は笑つた。

「やうやう……それでJそアホ子だよな」

「あ、青子アホじゃないもん！」

だが快斗はまだ笑つている。

「来いよ」

手招きされ、青子はまた元の場所に戻る。

「何?」

「よーく見てるよ」

快斗はぎゅっと手を握り、再びゆっくりと開いた。

すると、ポンと音がして、快斗の手には先程のトルコアイスがあつた。

「わあー。」

青子が歎声をあげていると、トルコ人のおじさんがやつてきた。

「才客サン。困ルネ。才金、払ツテナイヨ? 一百円。チヨウライ」

「あ、すみません」

快斗は慌ててお金を払った。

「快斗! これ、おいしいよ」

青子はアイスを差して、ペロリと一舐め。

「おこしーー」

「じゃ、オレもー。」

そうつづりと、快斗は青子の手からアイスをとつて、勝手に舐めはじめた。

「あーーー。」

「うめーー。」

「それ青子のー。」

「いいだろ、買ったのはオレなんだから」「ダメー！」

アイスの奪い合いに夢中で、密かに間接キスをしていたことに気付かない2人だった…。

秋祭り（後書き）

昨日、私の地域でも秋祭りがあつたもので…。

あのトルコアイス、おいしそーだったなあ。

すごい伸びるんですよねえ。

ま、財布を忘れてかえなかつたのですが…トホホ（トーホー）

次回も見て下さい

江戸の館 園子&娘（前書き）

今回より、園子と娘ちゃん編

カララン

「うー、これだけは…」

見るからにつるわんつるわん娘じや。

「名は？」

「鈴木園子です」

「何を聞きに来た？」

まあ、聞かずともわかるが。

「今遠恋中の、彼とのことなんですかどう

…やはり。

「なんか連絡とかちつともくれないし、もしかして、変な女に捕まつてないか心配で」

その前に自分の行いを見直せい。

「おぬし、相当地気が多いな」
「えつ？ や、そんなこと…」
「あまつフラフラしなによつてあるんじやな。もしその者がおぬし

の運命の相手だとしたら、おぬしのその性格を直さなかきり、成就せぬ。少しは大人しくしておれ」

「なつ…ま、マジで？」

これでけつとは懲りるがよい。

「本当にその者を慕つておるのなら、ハナサクベアジヤ」

「は…はあ…」

「それともうひとつ。その装飾、外しなされ」

アクセサリーとか、いつもの見ていって気分が悪い。

「ハナサクベアジヤ」と着飾るより、あつたままの素の自分が一番良いのじや。

カラーラーン

「ほお、また子供…。

今度はおなじやな。

「灰原哀」

「本当に名と姿ではないな。良かぬ。おぬしの極みは？」

「わあ？ 好きに占つて」

ふむ、なかなかきつぱつ無い。

嫌いではないぞ。

「良じ人生とは言へんよ、ひじやな」

「あら、やう？」

「今も何かの罪に心を痛めておるな。安心しなされ。おぬしの責任ではなかろう。もつと自分を大事になさ」

「…できるかしら、」の私に」

やはり普通の子供じゃないの。

「…恋かの」

「え？」

「おぬしが密かに想いを寄せている者には、すでに心に決めた者がおる。だからおぬしは諦めておる。違つか？」

「…どうかしら」

図星のようじやな。

「おぬしさまだ、本当に運命の相手とやらこませ出合つておらんな。いや、出合つておつても、気付いておらぬ。すぐ近くで、すでにおぬしを慕つておる。じゃが…もつ一人、おる。その者はおぬしともう一人の間で迷つておるな。おぬしを選んだのであれば、その仮面を脱ぎ捨て、その者の胸を思い切つて飛び込んでみなさい。わしが言えるのは、それだけじや」

ちと、へこかの。

「アハ…覚えておへや

あの娘の真の姿、見てみたい気もあるの。

本当は実に心の美しい娘じゃね？

ダイヤモンドのように硬く壊れにくいつ画面のせいで、血を吐き出しきれておりぬだけじや。

その運命の相手とやらが、この者を変えるかも知れん。

楽しみぢやわい。

虹の館 園子&哀（後書き）

リクエストありがとうございます（――）

キヌモヤの距離 やの4(前書き)

おわりへ完結(汗)

キスまでの距離 その4

「… めせえ」

このセリフを何度も言つたことだらう。

言つても言つても待ち人は来ない。

新一は時計を見た。

待ち合わせにはいつもはやめに来る彼女にしては珍しく、もう一十分は遅刻している。

そして、なぜかいつも遅れてくる彼は今日に限り早かついてしまつた。

昨日電話した時は、ちゃんと今日の予定を覚えていたはずなのだが

…。

まさか、まだ家にいるのだろうか？

携帯を取り出し、蘭の家にかけてみる。

『ふあい。もーりたあんてーじむしゅ お

電話の向こうで、間の抜けた声がする。

「お、おひやん？」

昼間から飲んでやがる。

その一言を飲み込んで、新一はたずねた。

「ら、蘭、知りません?」

『蘭ちゅわんはお留守ぢゃーす』

「そ、そう。じゃあ…」

どこのに行ったか、と聞くのでしたが、どうやらテレビでアイドルのライブを見ていたらしいへ、その質問は小五郎の歓声の中へ消えた。

ダメだ、こりゃ。

「失礼しまーす…」

もはや何も聞いていないと思つが、新一はとつあえずそういう言ってから電話を切つた。

「あの酔っ払い…」

ブツブツと文句を言つてみるもの、それで蘭が来るわけでもない。

もう一度辺りを見回してみたが、やはり来ていない。

となると、今度はアッシュにかけてみよつか。

『もしもしし~新一君~』

「園子か?」

園子はやけに早口で言った。

『なんか用？アンタ達今日デートでしょ？』

「蘭が来てねーんだけど、なんか知らねえか？』

『知らないわよー。こっちだつて久しぶりに真さん会うんだから忙しいの。じゃあねー。』

そのままきりれるかと思つたら、ちがつた。

『でも蘭、昨日一緒にショッピング行った時はデート楽しみにしてたわよ』

「あつや…」

『ま、その辺ぐるぐる回つて探してみれば？今日の蘭の服はあたしが選んだから、セツヒビックリしちゃつわよん』

そう園子は楽しげに言つて、電話を一方的に切つた。

「あ、おーー。」

『ひつじだ？

探せ？

言われた通りにするのも癪だが、新一は待ち合せの公園を離れて蘭を捜しに行つた。

しかし、探すと言つても蘭らしき人影は見当たらない。

途中、犬を連れた中年のおばさんとやけに露出度の高い服を着たギヤルとすれちがつたが、まさかと思つて通り過ぎた。

公園に男が数人たむろっているのは、そのギャルのせいだらうか？

確かにスタイルは良いが、何だか園子に似ている気がした。

苦笑して再び時計の側に戻ったが、やはり蘭は来ておらず、もう約束の時間を三十分は過ぎていることに気がつく。

もつ蘭の携帯には五、六回かけているが、一度も出でていない。

もしかして、蘭の身に何か…。

ところが、その携帯が突然なりだした。

「うわー」

あまりに唐突で、思わず驚く。

だがディスプレイに表示されている名前を見て、慌てて通話ボタンを押す。

「う…」

『ちょっとお。今どうにこいんの?』

「…は?』

電話から聞こえる第一声に、返す言葉が見つかぬ。

『私も結構遅れたけど・・・またか来てないの?』

「お前しゃべりこいんだよ?』

やつとの「」でわざと返すと、蘭のあつからかんとした返事が来る。

『米花公園の時計のところだけ?・そこによつて言つたの新一じやない』

驚いて辺りを見回すが、蘭の姿はない。

いるのはベンチで眠りかけているおじいさんと、先程のギャル。

そしてそのギャルについて来たらしい男数人。

「だ、だからどこのだよー?..」

「新一だつて言つてんでしょう。」

近くで怒鳴り声をあげられ、新一は飛び上がる。

「何度も言わせないでよー!..」

しかしながら、新一は言つて返さない。

いや、正確には言つて返せない。

「お、お前…誰?」

「…ハア!..」

田の前のギャルはマーキュアを塗った爪を新一の顔の前につきたてる。

「アンタ、自分の彼女の顔もわからんないわけ!..?」

「えつ？」

新一は一瞬、携帯を落としそうになった。

なんとか持ちこたえて、そのギャルの顔をよくよーく見つめる。

「う…蘭？」

「そうよ」

「マジで？」

「そう…」

新一は頭を抱えた。

「お前なあ・・・なんてカッコしてんだよー。」

「え？ 何が？」

蘭は何重にも重ねたつけまつ毛をパチパチとさせる。

他にも、胸元の開いた服やショートパンツ、ピアスをつけたりメイクをしたりと、蘭らしくはない格好だ。

「今すぐ着替えろ！」

「何でよ？」

「いいから！」

「替える服なんか持つてるわけないでしょ」

蘭は納得のいかない様子で言っていたが、新一はそれどころじゃない。

ひたすら蘭を下心丸出しにして見つめている男を睨んでいる。

「園子のやうやく…」

よつにもよつて、こんな服を選ぶとは。

「いいじゃない。たまにはこいつの着たつて」

「ダメだ！」

「何でアンタが決めんのよ！」

デートの前にケンカ腰になる2人。

チャンスかと男たちが目の中の色を変えたのが新一の視界に入る。

カチン、と頭の奥で音がした。

次の瞬間、新一は未だに文句を言つてゐる蘭の手を引き寄せていた。

「ちよ…っ」

戸惑つ蘭の唇に、自分のそれを半ば無理やり押し付ける。

もちろん、横田で男たちを睨んだまま。

その様子を見た男たちは、がつかりしたように去つていった。

何はともあれ、二人はキスまでの距離をゴールすることができた。

だが…この後、蘭の怒りの鉄拳が飛んできて、新一がデートできる状態ではなくなったことは、言つまでもない…。

キスまでの距離 その4（後書き）

「ゴールで来て、良二のやせり悪二のやせり……。

リクエスト募集中

占いの館 和葉&平次（前書き）

お次はこの二人！

カラカラーン

またうるせいうな娘じや わい。

「名は？」

「遠山和葉いいます！よろしくつ頼んます」

「…関西から来たのかの」

「はい！」、「大阪でもむつちや有名で、 じつちの友達に案内して
もろたんです」

誰じや、 じの館のことをべラべら喋りおつたのは…。

わしは大勢の人間に囲まれるのは嫌いじや。

「それで…おぬしの相談は？」

「あのう…幼なじみのことなんやけど…」

はて、 前にもあつたかの。

「おぬしはその者に素直に甘えておらんの。 その者もまた、 おぬし
の存在が近すぎて、 まだ自分の気持ちに気づいておらぬ」

「じ、 じやあへい… その人も、 あたしのこと、 その… 幼なじみ以
上に、 思てるんやろか？」

また同じ質問じや。

「わしが知るわけなかろ？ じゃが、わしの面つらをへむ闇を
「は、はい！」

「おぬしうちは互いに意地を張りすぎじや。たまこは一歩譲り、あま
り喧嘩はせぬよ。その者が時には不愉快な発言をするかもしけぬ
が、少しほ堪えなさい。気をつけなされ」

「わかったわ。おおきに！」

…本当にわかったのか。

カラカラーハーン

むー

不吉な気配じや！

「ほんぢね。邪魔すんでえ

「男ーそこで止まれ！」

な、なんじや、この不愉快なオーラを放つ奴は！

「おわつーな、なんやねん、ばあさん

「まあやん? まあやんじゅとー? わしはまだほんの五|十歳じゅだ
や!」

「！」

失礼な奴じゅ、つたぐ。

「その椅子、一步下げて座るがよ!」

「あ、ああ。これでええんか?」

ふむ、これならまだ良かろ!。

うわわわい者が近くにいると、わしの力が鈍る。

「名を名乗れ」

「服部平次や。あつ、お、オレは何も好き好んで来たわけやあらへ
ん! ただ、幼なじみの女に行けって言われてな。しつつこいんよ、
その女がまた…」

「少しば黙らんか! 集中できんじゅろ!」「たひやんじゅ

「す、スマンな」

全く近頃の若者は…。

態度がなつとらん!-

「それで、何の悩みじゅ?」

「特にあらへんな…。とりあえず、全体的に頼んます」

図々しい奴じゅわい。

「幼なじみの女があると言つたな」

「ああ。言つたで」

「どう思つておる?」

「じつは…そりゃ幼なじみや。子分とも思ひるけども」

鈍感とは悲しきものじやの…。

「その者とおぬしは、何やら強いもので結ばれておる」

「ん?あー…アイツがよく言つ、鉄のなんぢやらつてやつやな。こ
れがもうじつアホらしい話でな。ガキン頃たまたま…」

「ダラダラ喋るでない!黙つてわしの言葉が聞けぬのなら、この館
から出て行けえ!…」「わ、悪かったわ。すんません」

いかんいかん。

感情に流されてしまつたかの。

「やの者は時期に、おぬしことつてかけがえのない存在になるじや
うつ。互いに意地を張らず、喧嘩はほどほどに」

「意地つ張りなんはアイツや!オレは大人として相手してやつて…」

「それじゃ

「は?」

「おぬしはまだ、本当の自分の気持ちとやらには気付いておらぬ。
たまには意地も見栄もなしに、じつくりとその者と話してみるがよ
い。素直に自分の心と向き合つて。それがおぬしに必要なことじ
や。その者を大事におし」

「お、おお。なんやようわからへんけど…」

「あまり心配もかけぬようにな。おぬしも多少自由奔放な所がある
よつじやから」

「…も?他にもおつたんか?」

おつと。

口が滑ってしまった。

「何でもないわ。さつさとわしの前から消えた方が良いぞ」

同じような匂いがしたのう、あの青年達..。

せいぜい、未来の恋人を大事にするのじゃな。

古いの館 和葉&平次（後書き）

最近早くもネタ切れの u s a です

リクエストよろしくお願いします m(一一)m

異色な一人（前書き）

NOT 恋愛

異色な一人

喫茶店の中、一人の少女がこつそりため息をつく。

彼女はもう、二十分も前から、忙しい恋人を待っていた。

だが彼が待ち合わせに遅れるのはいつものこと。

温かい紅茶でも飲みながら、のんびり待とう。

カップを持ち、ホッと一息。

外をぼんやり眺めていると…

「わりい！」

突然声がして、彼女は恋人かと思つて振り向いた。

そこには頭を下げた青年が一人。

「しん…」

「わりい、青子！寝坊しちまつて…」

青年はそう言って顔を上げた。

顔も声も、彼女の恋人にそつくり。

だが…

「あの…私、青子さんじゃないんですけど…」「えっ？…ああっ！？」

青年は凍りついた。

(め、名探偵の彼女…)

そのことこづれくと、少し引きつった笑みを浮かべた。

「あ、「めぐ」めぐ。急いでたから…」

一刻も早く立ち去りつと、青年は辺りを見回す。

が、じつにう時に限つて探ししている人が見つからないのか、冷や汗をかいて立ち尽くす。

「もしかして、まだ来てないんじゃない？」「…、座つていいですよ」少女はここに笑つて空いた椅子を指差すが、青年は座るつてしまい。

「だ、大丈夫…すぐ見つかるから…」

ドアが開く音がした。

誰かがもうスピードで入つてきて、一瞬迷つたように足音が止まる。

そして奥の方の席へ…。

「わりい、蘭！急な事件で…」

「あ、あの…私、蘭て人じやないんだけど…」

その声を聞き、少女と青年はそちらを向いた。

「新一…」「青子…」

二人が叫ぶと、新一と青子も振り向く。

「蘭！」「快斗！」

ようやく巡り会えた？恋人達。

ところが彼女達は不満げな表情。

「ほお。新一は私と他の女の子との区別もつかないわけ…」

「あ…別にそういうことじゃ…」

「快斗、その子だあれ？青子もつ二十分ぐらい待ってたんだけど…」

「わ、悪かったって」

名探偵と大怪盗も、彼女の前では形無しだ。

すっかりへこへことしている。

彼女達が自己紹介を始めて、新一と快斗は下を向いたまま。

「ねえ…せつかく知り合ったんだし、一緒に遊ばない？」

蘭が提案すると、当然青子は賛成。

(名探偵と一緒に)

快斗はゾッとしたように青ざめる。

普段違う身、追われる身である以上、それはできるだけ避けたい。

「いや、オレ達はともかく、せっかくのデータなんだろ? 一人つきりの方がいいでしょ? な? な?」

半分願つかのような目で新一と蘭を見る快斗。

しかし、その願いは届く」となく…。

「や…。オレらは別に構わねえけど」

新一の即答に、快斗はがっくりと頃垂れる。

「…お前、どつかで見た顔だな?」
と、新一は快斗の顔を覗きこむ。

(ば…ばれた?)

「それは、二人の顔が似てるからでしょ」

焦りが面に出しあつた所を、蘭の一言で救われる。

「そつそつー最初に見た時はびっくりしたもん」

自分たちのことは気付いていないのか、蘭と青子はキャツキャと笑

う。

とつあえず息を吐いていると、青子が不思議そつに快斗を見た。

「どしたの、快斗？」

「あ、あーっ！そ、そういうえば、オレと青子は用事があつたんだ」

快斗は突然立ち上ると、青子の腕を引っ張った。

「用事？そんなのあつたっけ？」

「いいから行くぞ！」

半ば無理矢理青子を外に連れ出すと、快斗は肩の力を抜いた。

「ねえ、どうしたの？」

「何でもねえよ……。それより、映画行くんだろ？」

「あ、そっか」

青子はいそいそとチケットを取り出した。

今女の方に大人気のラブロマンスなのだ。

快斗にはさつぱりわからないうが、青子は嬉しそうに笑っている。

それを見ると、さすがに悪い気はしない。

「せひ快斗ー早く行ー。」

そつ言つと、今度は青子が快斗の腕を引っ張つた。

「やつぱいーなあ。感動しちゃひー。」

「ふあ……」

パンフレットを抱き締めて映画の余韻に浸る青子を尻目に、快斗は欠伸をしている。

「これのなーにがいいんだか…。ただ『ああ…愛してる』だつてよ。
おー氣色わりつ」

大袈裟に一の腕をさする快斗。

それを青子が睨みつける。

「「もう一…ひょつとぐらこ感動してくれたつていいじゃないー」」

青子の声とともに、もう一人誰かの声が重なる。

「え?
…ゲ」

顔が引きつるのを快斗は感じた。

今朝の占いを見ておけばよかつた。

そうしたら、ラッキーカラーかなんかで、この状況を免れたかもし
れないのに。

「わあ、青子ちゃん!」
「蘭ちゃん!—一人もここ来てたの?」

蘭と青子が再会を手を取り合って喜ぶ。

「でもね、新一つたらさつきからずっと欠伸ばつかして…。おまけ
にこれからあれ観よつて言いだすのみ」

蘭が指差したのは、推理マニアに入気のいかにも血生臭そつなミスティー。

「デートでこれ観よつと言つとは、流石名探偵。

心中で快斗はひそかに拍手を送る。

「あんなくだらねえもんよりもよつぽど役立つな」

いつの間にか新一は快斗の隣に来ていた。

「そ、そつか」

「大体、なーにが『あなたと一緒にならどこでも行けるわ』だよ。非現実的だな」

髪をポリポリと搔き、新一は言った。

「ねえ新一。青子ちゃんがこれからケーキバイキング行くんだって」「四人で行こりうよ」

「うなつたら腹をくくるう。

ほんの一、一時間一緒にいただけで正体がばれるわけでもあるまいし。

冷静でいよう。

そうだ、ポーカーフェイスだ。

今こそそれを実践すべきだ……。

「新一、行くよ。」

「快斗も早くうー。」

それぞれの彼女が呼んでいる。

そつそつと歩いていた快斗の肩に、新一はポンと手をおいた。

「や、行こう。怪盗キッドさん

異色な一人（後書き）

必死にかくしても結局ばれると、原作にはありえない怪盗キッドの大失態（笑）

「トバでいいて…（前書き）

新
蘭
で
す

「トバでいい…

「そんでホームズが…」

いい加減ため息をつきたくない。

彼…新一は、もう三十分はホームズについて語つている。

新一のホームズ話は幼き頃より聞かされているが、さすがに疲れる。

「ねえ、たまには別の話してよ」

「あ? どんな?」

彼女…蘭の言葉に、新一はキョトンとした表情を返す。

「べ、別の話は、別の話よ…」

「じゃあ…この間あった事件のこととか?」

「違います!」

少し怒り気味の蘭を見ながら新一はケラケラと笑う。

「それなら…怪談話でもするか?」

「さやああつ!」

新一が恨めしそうな声を出すと、蘭が悲鳴をあげる。

「ははつ。冗談だつて

蘭が何か言い返そつとしたが、その前に新一の携帯のバイブが聞こえた。

「はい。…ええ、わかりました。…はい、すぐ向かいます」

電話を切り、チラッと蘭を見やる。

「こつてらつしゃー」

蘭がぶつきつけられ、新一は顔の前で手を合わせてから走り出した。

ただでさえ事件続きで、最近まともに会えていないのに…。

思わず机に突つ伏してくると、園子がやつてきた。

「アンタつて本当に素直じゃないねえ…」

「な、何がよ」

「行つてほしくないんじょ? そつぱんばつこの」

「ち、違うわよー」

頬を赤らめて言つ蘭を、園子は呆れ顔で見つめている。

「蘭。それでちゃんと感じんの?」

蘭がわからないといつ風に黙つていると、園子は言つた。

「愛されてるつて実感! あるの? ないの?」

「あ、愛つて…別に私は…」

蘭は曖昧に答える。

「アンタ達さあ…もうすぐ恋人になつて1ヶ月だけど…進展あつたの?」

園子はまさかと思ひながらもたずねる。

「進展?」

「キスとか」

園子の口からでてきた単語に、蘭は顔を真っ赤にさせた。

「キ、キ、キス!？」

「恋人なら当たり前でしょ」

嫌な予感的中。

園子は呆れるのを通り越し、笑つてしまつた。

「アンタと新一君がその手のことに疎いのは知つてたけど、キスもまだなんだ?」

「…うん」

「いつそのこと、蘭からしきやべば?」

からかい半分に言つと、蘭は激しく首を振つた。

「むつ、無理無理無理!」

「いいじゃない。今は女の子から一歩ワードしてあげるべきよー。」

「だ、だつて……」

蘭は何か反論しようとしたとして押し黙った。

「どうしたの？」

「本当に新一は、私のこと好きなのかなって」

いきなりの蘭の言葉に、園子は持っていたジュースを落としからうになつた。

「ちよ、ちよっと。いきなり何言に出すのよ?」

「だって新一から直接好きって言つてもらつたの、ロンダンの時だけだし……」

小さな声で自信なさげに言つた親友の姿に、園子は急に立ち上がりと言つた。

「なら、言わせればいいのよ。」

「えつ? どうやつて?」

「それは園子様に任せなさい。」

瞳を見開いて輝かせる園子に、蘭は少し不安を覚えた。

「あーっ…」

警察も去り、少し落ち着いてきた中、新一は髪をかきむしっていた。

「ひつじて自分はいへ、素直じやなこのだひつ。

わつせだつて、蘭の話を茶化したりなどして…。

少しでも狼狽がでそつになると、笑つて誤魔化して…。

ついには事件と云つて逃げる。

おかげで蘭との時間は最近減つてきてこる。

これならもつと堂々と、蘭といたことと云つべきだった…。

「はあ…」

「ひつじたの、上藤君？」

深いため息をつくと、後ろから佐藤刑事が心配そうに話しかけてきた。

「あ、いや、何でも…」

「蘭ちゃんヒケンカ？」

「わつじつわけじやないんですけど…」

新一は頬を搔くと、思こせつてたずねた。

「佐藤刑事は、高木刑事に何でも言つてほしいですか？」

「えつ？」

佐藤刑事はしばらく驚いたように新一を見ていたが、やがて考へこんだ。

「そうね…私は、言つてほしいかもね」

「そうですよね…」

「ほひ。私つて、あんまり男の子の気持ちに敏感じやないかい。言つてくれなきやわかんないのよ…」

そう言つて、佐藤刑事は苦笑する。

「でも蘭ちゃんも、きっとそうだと思つわよ。前に由美が言つてたけど、女の子は大抵、言葉で言つてくれなきや伝わんないって」

「…そうですか。ありがとうございます」

「参考になつた？」

佐藤刑事がいたずらつぽく笑うと、新一も同じように笑い返す。

「はー。とも」

そこで佐藤刑事は田暮警部に呼ばれ、本庁に帰つとした。

「それじゃ、ちやんとおきてあげてなさいよー。」

と、言い残して。

「やめただよな…」

新一は駆け出し、踵を返し、走り出した。

帝丹高校は、すでに部活も終わつたところが多く、静かだつた。

それでも空手部は大会も近く、まだやつてると聞いた。

久しぶりに、一緒に帰るか。

新一は昇降口近くで、蘭を待つことにした。

鞆から推理小説を取り出し、しばし読み耽る。

しかし、待てども待てども、蘭が来る気配はない。

「おせえな…」

三十分は経つた頃、新一は携帯を開き、蘭にメールを送りつけた。

ところが、その前に携帯が鳴つた。

「園子…？」

珍しい、と思いながらも、メールを開く。

そこには、園子にしてはやけに小れいぱつとした文面で「いつ書かれていた。

『大変！蘭が空手部の一年に体育倉庫の裏で告られそうになつてゐ！急いで来て！』

「…は？」

突然のことにつき、それしか言葉が出ない。

次の瞬間、新一は走り出していた。

「だ、だから、オレ、毛利先輩が…」

いたいた。

新一は体育倉庫の陰に隠れ、そつと様子を窺つ。

残念ながら、その一年生の顔は見えない。

それでも蘭の表情だけはわかる。

困ったような、焦ったような、戸惑った顔。

「毛利先輩と工藤先輩って、幼馴染なんですよね？だつたらいいじやないですか！」

「あ、あの、私と新一は…」

蘭は必死に言葉を探している。

恋人だろ。そう言えよ！

新一が突っ込みを入れるも、それも届かず。

「そ、その…」

「オレは真剣に毛利先輩が好きですから！工藤先輩になんか負けませんよー！」

そのまま、その一年生はどこかへ走り去つた。

見つけたらただじゃおかねえ。

ブツブツと言いながらも、新一は今来たような顔で、蘭の前に出る。

「よ、蘭」

「し、新一…」

途端に蘭は慌てたよつて言つた。

「な、何してゐるの？事件は？」

「終わった。お前」」そ、練習は？」

「私は…ちょ、ちょっと休憩に…」

「主将がか？呑氣だな」

新一はやつと笑つたが、蘭は堅い表情のまま。

「…見てた？今の」

「…まあな」

隠してもばれてる。

新一は観念したかのよつと首をすくめる。

「なんで本当のことを言わなかつたんだよ？」

「本当つて？」

「…恋人、つてな」

蘭は不安げに瞳を揺らした。

「言つて良かつたの？」

新一が皿をぱちくつと叩いてみると、蘭は続けた。

「自信がなかつたの。私は本当に、新一の彼女なのかなつて

「…んだよ」

新一は頭を押されたと書いた。

「そんなの、当たり前だろ。オレだって不安だよ。蘭と一緒にいていいのかって。オレは素直じゃねえし、事件ばつかだし、言いたいことの半分もお前に言つてねえけど…。それでもやつぱり、オレがお前の傍にいたいんだよ！」

最終的には大声で怒鳴ると、空気が抜けたかのように新一はその場に屈み込んだ。

「こんな事、言わせんなよ…」

すると、蘭は頬を赤く染めながらも書いた。

「だつて…言つてくれなきゃ わかんないんだもん…」

瞳を潤ませ、赤くなる蘭の姿は綺麗だった。

新一は蘭の腕を引き寄せると、耳元で囁いた。

「好きだ」

「園子様のラブラブ大作戦、成功！」

仲良く寄り添つてゐる新一と蘭を遠巻きに見つめながら、園子はほくそ笑んだ。

「ま、演劇部の髪と空手部の練習着を借りたぐらいの価値はあったかもね」

手中の男ものの髪と、未だに身につけてゐる蘭の呼びの練習着をニヤニヤしながら見た。

「お幸せに〜

トリック・オア・トロートー（前書き）

今日は10月31日ー

と、言つねで…。

チビ新蘭

トリック・オア・トリート！

今日の工藤邸は、いつもと何かが違う。

「ハッピーハロウィン！」

そう。

今日はハロウイン。

よって、この有希子主催のハロウインパーティーが催された。

もちろん、参加者は全員仮装している。

布を被つただけの「ゴーストや、お面を被つてそれっぽくしている人もいる中、大半の人があ面白がって手の込んだ仮装をしている。

「ハーイ、英理」

「ああ、いたいた、有希ちゃん」

英理は有希子に手を振った。

「あら、雪女？」

「近づくと凍り付くわよ」

有希子は白い着物をひらひらさせた。

「で、あなたは何の仮装？」

「見てわからない？ 有能な弁護士の仮装よ」

至つていつも通りの格好をした英理は、眼鏡の位置を直した。

「それに、今日はこの子を楽しませたかったから」

「まあ！ 可愛い魔女さんね」

魔女らしく大きな帽子を被つて筆を手に持つた蘭を見て、有希子は歓声を上げる。

ところが、蘭は仮装した有希子の姿を見て、いきなり泣き出した。

「うわ～ん！」

「あ、ら、蘭ちゃん？」

「そんな格好してゐからわからないのよ。 蘭。 新一君のお母さんよ」「ちがうもん！」のひとおばけだもん！」

有希子の顔を見れば呪われるとでも思つてゐるのか、蘭はキョッと目をつぶつて叫んだ。

「だから五歳にはまだ早かつて書つたでしょ」

「そんなことないわよ。 つちの新ちゃんなんか見てよ。 ほら」

有希子の指差す方を見れば、小さな男の子が狼男のマスクを引っ張つて招待客を困らせている。

「「ハ、新ちゃんー悪戯しないの」

「だつてかあせん！」のひとおかしくれなかつたんだよ？ だからいたずらしてやつたのや」

新一はませた口調で言つて、今度は別の密の所へ行った。

「男の子は元氣ね。あの子は何の仮装かしら？」

英理は走りまわる新一の姿を見て、呆れたように言った。

「ドランクーラ伯爵よ。最初は牙をつけるの嫌がつてね」

「何で？」

「さあ…」

一人が話している間中も、蘭はしゃがみ込んで耳を塞いでいる。

「蘭ちゃん。あっちでお菓子もらつてくれば？」

「やーだー！」

誰かが話しかければ大声で喚き、手がつけられない。

「この子は本当に怖がりだから…」

「ま、しょうがないわよ。女の子なんだし」

困ったような顔の英理とは対照的に、有希子は笑顔。

「それに、新ちゃんが相手してくれるわよ

「大変なんじやない？ 新一君」

「大丈夫よ！」

そう言つと、有希子は新一を呼んだ。

お化けたちの間を縫つて、新一が顔を覗かせた。

「なに、かあさん?」

「蘭ちゃんと一緒に菓子もひつてきて」

「ああ。いいよ」

新一は頷くと、蘭のもとへ行つた。

「らん。おかしもひつてひづせ」

新一の声に、蘭は少し顔をあげた。

だが、また短く悲鳴をあげて泣きはじめた。

「あ～あ～。新ちゃん。女の子は泣かせちゃダメよー。
「ながせてねえよー!」

「ど」か楽しげにワインクする有希子を、新一はジト目でこらむ。

「うわっ。だからいやだつたんだよ。ほんなかつこ……」

そう言つて新一は、乱暴に牙を外した。

すると、ほとんどのマイクをしていないため、新一の素顔が見える。

「しんいち?

「そうだよ」

「やつたあーしんいちもともどつたあー!」

蘭は嬉しそうに囁つて、新一に抱きついた。

「おこ、らんーはなれりよ」

新一は顔を真っ赤にさせた怒鳴るが、蘭は離れない。

新一の背中に回る腕が、少し震えていた。

「こわがりのくせに、くんじゃねえよ」

「だって、おかあさんがおかし、たつくさんもいらぬつてこつてた
し、まじょさんのふく、かわいかつたから…」

不貞腐れたように蘭は言った。

「でもだれもおかしなんかくれないし、みんなおばけばっかりなん
だもん」

「らん。トリック・オア・トリーント、つていえばいいんだよー。」

「トリック・オア・トリーント？」

聞きなれない言葉に、蘭は聞き返す。

「おかしをくれなきやいたずらするやーつて」と。だから、たとえ
おばけでもおかしをくれなかつたらいたずらしてやればいいんだつ
て」

「やつか… そうなんだ！」

途端に蘭は顔を輝かせた。

「じゃあ、おかしもいらぬの？」

「むちゅん…こじりやせ」

「うそー。」

一人は手をつなぐと、一緒に招待客の中へと潜り込む。

「トリック・オア・トリークー・むかしちょうだい」

「はこねー、どうだ」

メテコーサの格好をした女性が、二三郎ながら飴てくれた。

「やつた！」

「な？ こわくねえだろ？」

「うん。ぜんぜんこわくなー。」

今日初めての蘭の笑顔に、新一はホッとしたような表情を浮かべる。

「トリック・オア・トリークー。」

「ん？ あ～」めんよ。さっきた子の分でなくなってしまってのお

…

フランケンの老人はそう言いつて蘭の頭をポンと撫でた。

一瞬蘭はビクッとして身を縮めたが、もつ泣きはしなかった。

「じゃ、いたずらしがやつよ？」

「ほお、ドリキコラ君。何をする気かね？」

「いひかるんだよー。」

新一はフランケンに飛び掛かると、無理矢理マスクを外そうとした。

「ああ、ああ、参った。降参だよ」

フランケンが両手を上げると、新一もおりた。

「つまごぐわ、らん！」

「うん！」

しばらく経てば、一人の両手には抱えきれないほどのお菓子で一杯になつた。

「あら。良かつたわね、一人とも」

英理は一人に笑いかけたが、新一はさつと有希子の陰に隠れた。

「やあねえ、新ちゃんたら！」

有希子は笑つて新一の額を突いた。

少し新一は不満げな顔。

「蘭、もつお化けは平氣？」

「へいきだよ！だつて、おかしくれるんだもん！」

蘭は英理にお菓子を見せて瞳をキラキラとさせた。

「おかあさん。おばけつてわくないんだねー！」

すると、ビニから声がした。

「じゃあ…わたしの」ともへいき…？」

「さつ…さやああッ！！」

突然現れた着物の女の子に、蘭はやはり悲鳴をあげて逃げた。

「やの！」。やれなんのかやうだ？」

「やしきわらしよーきまつてんじやない」

園子は口紅を拭きとるべ、「いやー、やとした。

「あんまおどりかすなよ」

「だいじょ「ひふ。りんは」わがりなままがいちばんいいんだから」

一人でお化けたちから逃げ惑う蘭を見ながら、新一はひとつやりため息をついた。

ダブルデータに「用心!」? (前書き)

亞由美様リクエスト

新蘭+平和

ダブルデートに「」用心ー？

人がたくさん行き交っている。

子供の笑い声。

友達とはしゃぐ学生達。

仲のいいカップル…。

ここはトロピカルランド。

様々な笑顔が輝く場所。

そしてまた、ここにも一人、笑顔の人気が。

「あたしここ行きたいわ！」

「あつ、私も！」

地図を見ながら瞳をキラキラさせる少女。

「でもこっちもええなあ…あーっ！あたしには決められへん！蘭ちゃん決めてえな」

和葉は困ったような表情で蘭を見た。

「えつ？で、でも和葉ちゃん初めてなんだし、和葉ちゃん決めなよ

蘭がそう答えると、和葉は再び地図に見入った。

「行きたいと」^{いざよ}うさんあつてわからへん。なあ、平次」

和葉が顔を上げる。

しかし、平次の姿はない。

「あれつ？ 平次どこに行きよつたん？」

「そついえば… 新一も」

蘭も辺りを見回す。

だが、彼女達の愛しい探偵の姿はない。

「さつきまでおつたよつな…」

「そつね…」

はてさて、一体どこへ…？

「ちやうぢやう！ 犯人はこいつや」

「ちげえよ。そう見せかけて実はこの人だつて」

「はあ？ お前何言つとんねん？」

「お前こそ何言つてんだよ」

「…おつたね」

「そつみたい」

二人は推理小説片手に騒ぐ平次と新一のもとへ向かつ。

「せやから、犯人はこいつやつて。間違にあらへん…」

「だからこいつちだつつの…」

「いやいや、工藤。それは甘いわ」

「んな」とねえだろ」

「二人とも、うるさいで」

「こじ遊園地なんだから。事件のことなんか忘れなさこよ」

和葉と蘭の言葉に、二人は黙つた。

「こなんといふまで来てなんでそんな話せなアカンの。帰つてから
でええやん」

「わ、わかつたわ…」

平次は少し残念そうに呟く。

「今日は和葉ちゃんと服部君の案内役なんだから、これは没収！」「あつ、おい！」

新一は蘭に小説を取り上げられる。

「そ、どに行こつか

「せや。こんな推理ドアホほつとして、あたしらだけで楽しも…」

すっかり不機嫌な彼女たちを見て、新一と平次もため息をつく。

「お前のせいやぞ、工藤」

「あ？ お前にも責任あんだる。小説読みたいって言つたのお前なん
だからよ」

「お前が持つてけえへんかつたらこないことにば…」

「うるさいわ！ええ加減にせえ！」

和葉の一喝で、二人は再び沈黙。

「なあ蘭ちゃん。ミスティリー・スター乗つてもええ？」「えつ？」

思わず蘭は新一を見た。

一人にとつてはあまりいい思い出とは言えない場所だ。

「そ、そこはちよつと…」「ダメなん？」

和葉がしゅんとしていつと、平次も横から口を挟む。

「なんや？なんかあつたんか？」「ちよつとね」

曖昧に答える蘭に、平次は目をキョトンとさせる。

「いいんじゃねえか。行こうぜ、ミスティリー・スター」

新一が後ろから声をかける。

「いいの？」

蘭は不安げに視線を揺らす。

「そんないつも事件が起きるわけじゃねえし。いいだろ」

そう言って新一が安心させるように笑うと、蘭もこくつと頷いた。

「じゃあ、行こう、和葉ちゃん」

「ええの？」

「うん！」

和葉は嬉しそうな笑顔をつくると、蘭の手を引っ張つて走り出した。

「なあ工藤。オレらに何しに来たんや？」

二人で先に行く彼女たちを見ながら、平次が言った。

「さあな…。オレは確か、蘭にダブルデートって聞いた気がすっけど」

新一も苦笑気味に答える。

そう。

今日は久しぶりに大阪から出てきた平次と和葉と共に、トロピカルランドへ遊びに来たはず。

「オレもや。これは和葉とねえちゃん、オレと工藤のダブルデートになつてんで」

「氣色わるい」と囁つたよ

新一は大袈裟を腕をさする。

「スマンスマン。つい思ったこと囁つてしまたわ」

大して反省していなむかに平次は謝る。

「さつさと行くぞ」

「工藤。拗ねんなや」

一人で歩き出す新一を追いながら、平次は言った。

「拗ねてねえよ」

「お前の顔にはつきり書いてあるわ。ねえちゃんとのデート邪魔されて悔しい！ってな」

すると、新一の顔が一気に赤らむ。

「べつ、別にそんなんじや…」

「ま、和葉のアホが突然こっち来てもうたからなあ」

「お前だって一緒だろーが」

「オレはアイツに無理やり連れて来られただけや！」

平次はそう言つてそっぽを向く。

「嘘つけ。無理やり連れて来られた奴が、なーんでお泊まりセッテなんか持つてきてんだよ」

「ばれとつたか」

歯を見せてにっこり笑う平次を、新一は冷めた表情で一瞥し、蘭達を追いかける。

「ぐ、工藤！」

平次も慌てて後を追う。

ミステリー「スター」によく着いたが、先に着いているはずの蘭と和葉がいない。

「アイツらどないしたんや?」

「まさか蘭の奴、こんなところで迷つてんじや……」

新一は呆れたように呟つと、携帯を取り出す。

平次も同じく、和葉に電話をかけている。

「和葉の奴、オレらが遅なつた時はギャーギャー騒ぎよつたくせに、自分達は自由なんかい」

しかし…

「出でへんやんか」

「いりもだ」

一人して携帯をしまつと、辺りをキョロキョロと覗回す。

「ホンマに迷子なんが、アイツら…」

高校三年にもなって…。

「どうあえず、探しに行げ」

「お、おお」

びつから、平次も騒いでいる状況でないことを語りたがって…。

すぐさま真剣な表情になつて和葉を探しはじめた。

「まさかアイツらまで拗ねてんじゃねえだろ?」

「それがホンマやつたら怒鳴り散らしたるわ」

「冗談みたいなことを言いながらも、表情は険しい。

「男と一緒にいたりしてな

新一が苦笑交じりに言つて、平次が田を怒らせる。

「はあ…。オレらがせつかく探しにやつしゆつむけ、あのボケ…

「あ、いや、かもだよ、かも…」

新一は慌てて取り繕つたが、平次は聞いていない様子。

「見つけたらただじゃおかへんぞ、アイツ…」

ブツブツと言いながら田を座らせている。

余計なことを言つたか、と新一も反省。

そして横を向いた瞬間、彼にとつては今まさに「冗談と思っていた光景が飛び込んできた。

「おい服部

「なんや？」

「いたぜ」

「ホンマか！？」

平次も新一に指差された方向を見やる。

やはり、一人の男に声をかけられている蘭と和葉を見て、新一と同じく頬を癡躰させた。

「誰やアイツ」

「知るかよ」

だから一人きりで歩かせたくなかつたのに、と新一は心の中でぼやく。

ただでさえ可愛らしい容姿をしたあの二人なら、男の一人や一人、簡単にひつかかってくるかもしれないが…。

できることなら、新一の中の[冗談]のままであつてほしかった。

「ちよっぴり行つてよよか」

と、平次がいつになく低い声で言つた。

「本氣出さなよ」

やつ言いながらも、一番イライラしている新一。

平和なトロペカルランド内で悲鳴が響き渡つたのは、その三十分後
…。

「何で投げ飛ばさんや、和葉」

「あんなの回し蹴りで一発だろ」

「し、しゃあないやん」

「男の子一人じゃ、こいつに勝ち目ないと思つて…」

四人（正確には新一と平次の二人）のあまりの迫力のためか、周囲に人だかりができている。

だがそのことに気付く余裕もないまま、新一と平次は怒鳴り散らしていた。

「大体急にいなくなつたりすんじやねえよ！探すのにもうちょっと手間がかかるたら、お前ら今頃なあ…」

「そうや！ もうちつと考えてから行動せえ！」

これに少しカチンときたらしい彼女達は言い返す。

「何よーさつきまでは推理小説に夢中だつたくせにー…」「せやせやーそれなんに偉そうにせつきから…」

そう言わると弱い。

彼氏達が黙ったのを見て、こじわざばかりに続ける。

「大体、なーにが『そいつら空手と合氣道の達人だから、手え出しだらあの世だぜ？』よ！ 最低！」

「そこまで自分の彼女悪く言えるなんて、アンタら男の風上にもおけんわー！」

「あ…いや、その…」

何だか危険な匂いがする。

本日一回田の悲鳴が響き渡つたのは、その直後…。

「さ、和葉ちゃん。一人で遊んでよっか」

「大賛成や」

「投げ飛ばされたんはオレか…」

「回し蹴りされたのはオレかよ…」

お互いにもらった氷を顔面に押し当てながら、新一と平次はため息をついた。

「なあ工藤…」

「あん?」

「やっぱあいつらの」と懸く言つんは、自分たちのためにもやめた方がええな

「ああ…オレもそう思ひ」

一週間後、雑誌に小さく、こんな記事が載っていた。

“東西の名探偵、遊園地にて恋人と大喧嘩 名探偵も、彼女の喝には弱い！？”

Are you happy? (前書き)

星野由香里様リクエスト

やきもち蘭ちゃん?かな。

新蘭

Are you happy?

彼女は至つて不機嫌だった。

何故不機嫌なのか。

それは彼女の恋人である、名探偵工藤新一に原因がある。

そう。それはつい数分前の出来事。

いつも通り、一人で他愛もない話をしながら登校してきた。

ちょっとといい雰囲気になりかけていた。

ちょうど今は周りに誰もいないし、少しごらいなら……。

二人はわずかに視線を交わした。

どちらからともなく、顔を近づける。

お互いの息がかかるほどに近くなつた、その時！

「工藤先ぱーい！」

「キヤー！カツコレー！」

誰もいないと思っていたところへ、たくさんの中の子たちが現れる。

当然、二人は慌てて離れる。

「昨日も事件解決したんですねー!？」

「す、すごい!」

「マジ最高!」

女の子たちは口々に言つては黄色い歓声を上げる。

そのうち、蘭は新一の隣から引き離されていった。

「あつ……」

と、声をあげた時にはすでに遅く、新一を取り囲んだ一行は学校へ向かっていた。

あの中に新一がいるのなら、近づくのは困難であろう。

結局、蘭は一人で登校する羽田となつた。

以上が、蘭の不機嫌の原因である。

新一のファンからの妨害ならもう慣れっこだった。

だが、これで本当にいいのだろうか。

自分は今、新一といれて幸せなのか。

付きあつた当初は良かった。

二人の時間があつたから。

なのに今は…。

「先輩！ サインお願ひします」

「握手してください！」

「私は写真！」

教室についてからもなお、新一はファンに囲まれっぱなしだ。

満更でもない表情をしているのが、余計に憎たらしく。

「あの推理オタクめ……蘭という妻がいながら。私がちょっと行って話してくれるわ！」

園子がそう言って立ち上がりかけたが、蘭は慌てて止めた。

「べ、別にいいわよ」

「何でよ？」

「は、恥ずかしいし……」

園子は呆れたような顔になると、ハアッと息を吐いた。

「蘭。そのままじゃ、彼女の座を誰かに取られけりやつわよー。」

「そ、それは……」

蘭は口籠る。

「たまには素直に甘えなきや！ 新一君ばつか蘭に甘えて、蘭てば、まるでアイツの母親よ？」

と、園子は新一を指差す。

「今蘭は、堂々と自分が新一君の彼女だって、いっていいんだから！自信持つて！」

少し強めに蘭の背中を叩く。

蘭は一瞬痛そうに顔をしかめたが、すぐに笑顔になる。

「うん。ありがと、園子」

「蘭。帰ろうぜ」

「新一…」

放課後、ファンから解放されたらしい新一は、蘭に声をかける。
だが、後ろにはまだ諦めきれていない数人の女子の姿。

「いいの？」

「ああ」

蘭は不安そうに後ろの方を見る。

朝のよう、また邪魔されたら…。

しかし、新一はさほど気にしていないらしい。

珍しく自分から蘭の手をとると、スタスターと歩きだした。

「ちょっ、新一！？」

それでも無言で新一は蘭を連れ出す。

「痛いってばーもう！」

教室の外へ出ると、蘭は新一の手を振りほどいた。

「どうしたの？」

「あ……いや、何でもねえよ」

そう言いながらも、どこか新一の表情は険しい。

「なんかあつたの？」

一瞬、ギクッとしたように身を縮めた。

しかし、すぐに笑顔をつくり、もう一度何でもない、と言った。

「行くぞ」

「う、うん……」

どこか違和感を覚えながらも、蘭は新一の後を追う。

「あっ、工藤先輩、来た～！」

「毛利先輩だけずるいですよ」

「つちらりも一緒に帰る～！」

校門付近で待ちかまえていた新一のファン達。

あつという間に新一を取り囲み、蘭は遠ざけられた。

「ちょ、ちょっと……」

言い返そうとしたが、ファンの女の子たちは新一の腕を引っ張つて
わざわざ歩きだし、蘭には田もくれない。

「お、おー」

ただ引っ張られていくだけの新一。

それを見ていくつひに、心の奥底から、何か黒いものが湧き上がってく。

猛烈に苛々する。

今すぐに女の子たちを新一から引っ張り去りたい衝動にかられる。

でも…あとわずかな所で、勇気が出ない。

「蘭！」

新一が前の方から自分を呼ぶ声が聞こえてくる。

気付けば、新一達はかなり遠くに行っていた。

それでも女の子たちがニヤニヤしているのだけはわかる。

蘭は走り出した。

恥ずかしい？

そんなの、気にしてなんかいられない。

だつて、好きなんだもん。

好きって気持ち、簡単に止められる？

きっと私には…一生無理。

蘭は新一達に追いつくと、一番新一に引つづいていた女の子を新一から放した、

「きやつ！？何すんのよ！？」

当然のことながら、女の子は甲高い叫び声をあげ、蘭を睨んだ。

「工藤先輩といつとも一緒にだから、調子に乗つてんのよ」「でも先輩達つて、正直恋人っぽくないしい」「うちらが一緒に帰るくらい、いいじゃないですか。つーか、真面目に痛いんですけど？謝つてくれません？」

クスクスと笑つて、蘭の様子をうかがっている。

だが、蘭はキツと彼女たちを見つめたまま、言った。

「周りからどんなふうに思われてもいい。新一の彼女は、私なの！」

これには新一も驚いたような顔をした。

「たとえあなた達が新一のことどれだけ好きでも、私だって大好きなんだから…こればっかりは、絶対負けないんだから…」「わ、わかったわよ。行こう！」

蘭の気迫に、女の子たちは引き上げた。

すると、蘭はその場にへなへなを座り込んだ。

耳元が真っ赤になつてゐる。

「だ、大丈夫か？」

新一が慌てて手を差し伸べると、蘭は一瞬新一を見た。

ところが、すぐに目を逸らしてしまった。

「蘭？」

心配したように新一は蘭の顔を覗きこんだ。

「み、見ないで！」

蘭は顔を手で覆つて隠した。

「今、私すつゞい馬鹿なことして…。酷い顔してるから…」「なんことねえって。ほら、立てよ」

新一は蘭の腕を掴むと、無理矢理立たせた。

頬が火照つていて、瞳が潤んでいる。

こんな状況にもかかわらず、可愛いと思う自分がいる。

「その…悪かったよ」

直視できず、やや視線を下げながら新一は言った。

「お前が辛い思いしてんのはわかつてたけど、今まで、何もできなくてよ…。だから、寧ろ良かった。お前の正直な気持ち聞けてよ」

しばらく間をあけて、蘭はたずねた。

「ねえ新一。私と付き合って、何が良かつたとゆつへ…」
「…」

やつまつと、新一は蘭に唇を重ねた。

「幼馴染のままじや、できねえからな…」
「…そうだね」

はにかみながらも、蘭は答えた。

Are you happy?

We are very happy!!

Are you happy? (後書き)

多少二人のキャラが違ってるかもです… (汗)

すいません^_^(ーー)^

リクエストまだまだ受付中(^〇^)ノ

お化け屋敷は愛の予感? (前書き)

星野由香里様リクエスト

文化祭での一コマ。

新蘭

お化け屋敷は愛の予感？

「すつごい人…」

「ホントねえ」

吸い込まれるように校舎に入ってくる人々を見て、蘭は口をポカンと開けた。

園子も隣で、驚いたように見ている。

「去年あんなことがあったのに、結構来るもんだねえ」

「それは言つちゃダメよ、園子」

高校生活最後の学園祭。

今年こゝは何もなく無事に終わればいいが…。

去年と同じ続き、蘭たちのクラスでは、演劇をやることになつてゐる。

主役はもちりん蘭と、すぐ側で退屈そうにしてゐる一人の青年。

「そんなんじゃ、王女を助ける騎士には相応しくないわよ、新一君」と、園子が呆れた声を出す。

「お前が勝手にやらせたんだろ」

新一は苦い顔をして答える。

だが園子はそれを無視し、時計を見つめた。

「うーん。うちのクラスの出し物までには、まだ時間があるわね…」「じゃあ、どつか回つてこようよ。昨日の校内発表だけじゃ、回りきれてないし」

蘭が早速パンフレットを取り出しだが、園子はその手をぐっと掴んだ。

「蘭。女子高生はもうすぐ終わるのよ~少しは彼氏と、いこ思い出作ろうとか、考えないわけ?」

「えつ?」

いきなり真面目な顔で聞かれ、蘭は戸惑つ。

園子はニヤリとすると、蘭に小声で囁いた。

「それならいいこと教えてあげるわ、蘭」

「な、何?」

園子は蘭からパンフレットを取り上げると、あるクラスを指差した。

「ここ! カップルで行くと、愛が深まるつていう、ジンクスがあるのよ」

「…はあ?」

蘭がよく見ようとパンフレットを覗きこむが、何故か園子は隠した。

「新一君と行つてきなよ。時間はたっぷりあるし。あんたは開演の

一時間前に戻つてきてくれればそれでいいからや

「でも、そこ何をやつてるの？」

「いじからーじゃあ、あたし準備あるからー。」

「ちょ、ちょっとー。」

結局パンフレットを持ったまま、園子は体育館に戻つていった。

「どうした？」

「あ…な、何でもないー。」

慌てたよう手を振る蘭を、新一は怪訝そうに見た。

「んで、園子はなんだって？」

「時間あるから、好きなとこ行つててこいつて」

「それならぐるぐる回つてよがりば！」

「ね、ねえー！」

先に歩きだす新一の制服の袖を、蘭はキヨシとつまんだ。

「あん？」

「ちょっと…い、行きたいとい、あるんだナビ…」

「ああ。いじけど」

蘭は少し頬を緩めると、新一に並んで歩きだした。

「……」の、はずなんだ…ナビ…」

「くー。お前にじちや珍しいな」

保護者会特別展示『ホラーストーリー』

不吉なロゴで書かれた看板の下には、暗い入口がある。

どこからどう見ても、これは蘭が大の苦手とするもの。

そう。お化け屋敷。

「や、やつぱりめよつか…」

早くも逃げ腰の蘭。

しかし新一は、すでに中に入っている。

「し、新一？」

「入んねえのか？」

「ひつや、ひ出ぬ氣はなこらしこ。

仕方ない。」

蘭は覚悟を決めると、深呼吸をした。

ゆつくりと足を踏み入れる。

「…暗いよお」

今になって、園子が催し物を教えたかった意味がわかつた。

出たりとつねめてやる。

といひながら、そんな強いことを思えたのも、この時までだつた。

「ああああッ…！」

数分と経たないうちに、お化け屋敷に蘭の悲鳴が響き渡る。

新一はとこうと、大して驚きもせず、蘭の前を歩いてくる。

「ま、待つてよ～」

半泣きしながら蘭も後を追う。

だが、その前になにかに躊躇いた。

「いたつ

何か落ちている？

よく見ようと屈んだ。

見えた瞬間、見なればよかつたと後悔

「一九四九年八月一日」

人間の首（もちろん作りもの）を見て、蘭は叫び声をあげた。

立ち上がる」としても
腰を抜けて足に力が入りなし

新一九

弱々しく新一を呼ぶが、退事力なし

第10回

「江心行」

誰か薄情者たよ

目の前に、スッと手が出された。

それが新一の手であると悟付くのに、しばらくかかった。

一
五二二
卷之三

「だ、だつたら返事ぐらいしてよ、バカ！」

「したよーお前が自分の悲鳴で聞こえなかつただけだろーがー！」

蘭が黙りこむと、新一は蘭の手を掴み、引っ張り立たせた。

「…わいつあと行くぞ」

「ひ、うん…」

手に新一の温かさを感じつつ、蘭は先に進みだす。

まだ怖いのに、不思議と外に出たくないと感じる。

もつ少しだけ、あともつ少しだけ続いてほしい…。

だがそんな小さな願いも叶わず、出口の明かりが見えてきた。

「ほー、もう終わつたぞ」

「よ、良かつた…」

そつ口では言つたものの、少し残念さが残る。

「とこりど、オレら何時までに戻ればいいんだ？」

「えつと…こけないーもつ戻んなきやー」

二人はそろつて体育館へ戻る。

開演までちょうど残り一時間。

ステージにはすでにいくつかのセットが並んでいた。

「おー一人セーン。そろそろ着替えてー」

ステージの上で指示を出していた園子が一人に気付き、大声を出す。

「園子！なんなのよあそこ！」

「ジンクスはホントよ。黙つてたのは悪かつたけどさ……」

園子は顔の前で両手を合わせた。

「でもマジできくもんだねえ、あのお化け屋敷……」

「えつ？」

園子の視線の先には、まだ繫がれたままの手。

それに気付いた二人は、一斉に手を話した。

その日、一回目の劇は、主役が動搖していたため大失敗に終わつた
そうな。

マー・メイド（前書き）

前回の続々

新一郎と蘭たちやんのクラスの、演劇の様子。

もちろん、新蘭。

マーメイド

『え～…わ、私の心を掴んで離さぬ…み、魅惑の、姫君よ…』

薄暗くなつた体育館の中、一人の青年がライトを浴びている。

舞台の上で、一国の王子の衣裳を着せさせられた彼は、仏頂面で、セリフをつつかえながらも必死で演じていた。

『ど、どうか、私の声が聞こえているならば…私の前に、現れではくれぬだらうか…』

その様子を舞台袖でみていた園子は、台本を握りつぶす。

「アイツ…私の台本を無駄にする気? 何なのよあの一本調子は」

ライトの位置が切り替わり、淡いブルーのドレスを着た少女が浮かび上がる。

彼女は口を開かぬまま、胸に手をあてて、悲痛の表情になつた。

すると、彼女の声がスピーカーから流れはじめた。

『ああ。愛しの王子様。今すぐあなたのもとへ駆け寄り、その姫が私と伝えたい…。この声が出ようならば、私はあなたに向かつて、すぐさま愛の言葉を向けることでしょう。なのに…ああ、もう私は、あなたを愛していると言つことができない! 人魚である私の尾びれの代わりに、私は人間の足を手に入れた。けれど痛くて歩けな

い。痛いと言つことすら、私にはもうできないのです！あの優しい魔女に、再び会えるものなら、せめて声を取り戻したい…。の方に、私の愛の言葉を伝えたいのです！』

何と恥ずかしいセリフの連発。

会場内で笑つてゐる生徒が何人かいる。

実際、今は泣く演技をしてゐる蘭の顔が、微かに赤くなつていた。

続いて新一のセリフ。

『わ…私の耳に、あの美しい姫君の歌声が、離れないのだ。そうだ。國中の、娘たちを集めよ。その中から、あの声の主を見つけ出すのだ！もう一度会い、私のこのあふれる気持ちを伝えたい』

あまりにひどい棒読みに、クラスメイトまでも笑いだす。

さすがに園子も呆れかえつた。

やがて最初の開演が終わり、二人は舞台袖に戻つてきた。

「ちょっとお一人でしょん…」

園子はズイツと近づくと、低い声で言つた。

「なんなのよ、あの劇は…」

「だ、だって恥ずかしいセリフばっかりじゃない！もう少し普通のセリフにしてよ」

蘭が抗議しても、園子は首を横に振る。

「ダメダメ！」の台本は、これでも十分に抑えたつもりなんだから！

「はあー？」「それでかよ？」

新一は台本をひらひらさせて顔をしかめた。

「何よ、新一君。私の台本に文句あんの？」

「まず、何でオレが王子なんだよ！？他にもやれそうな奴いっぱいいんだろーが！」

「姫が蘭だつて決まつたら、アンタしかやる人いないでしょ？」

園子は台本を取り上げた。

「とにかく、次は一時間後だからね！それまでこじりちゃんと練習していよ！」

セツト係に呼ばれ、園子はそっちの方へ向かった。

「つたぐ。これ以上どうひなつかつてーんだよ…」

新一は髪を搔き鳴った。

「あと一回あるわけでしょう？」「これ…」

隣で蘭も疲れきった表情。

「何でオレが劇の王子役なんか…」

新一がブツブツと言つてゐると、蘭は目を伏せた。

「そんな、嫌？」

「あん？」

「私と一緒に演劇やるの、そんなに嫌なの？」

段々と涙声にかわっていく。

蘭の大きな目が潤む。

「や……あの、やつわけじや……」

「もういいわよー。」

新一が何か言つよつ先に、蘭は立ち上がるビデレスをつまんで走り出した。

「おー、蘭！」

「ほつとけ！ 藤」

「やうやう。女はちょっと放つておいた方がいいんだ、って」

追いかけようとする新一に、男子達が叫んだ。

それを聞くと、少し落ち着かせた方がいいのかもしれない、と思い、新一は待つことにした。

しかし、蘭は戻つて来ない。

そろそろ一回目の開演時間だ。

「新一君、蘭はどうしたの？」

園子があたりを見回してたずねた。

「どうか行つちまつてそのままだよ」

新一はブスツとして答える。

「あーもうー始まつちやつじやないー！」

園子は携帯を取り出した。

蘭のアドレスを開き、電話をかける。

「…ダメ、出ないわ

「もうお密さん入つてるよ」

様子を見ていた女子たちが言つた。

「今更お開きにはできないし…しようがないわね、私が代わりに…
「遅くなつて」めん…」

後ろから突然声がかかり、全員がビクッとして振り向いた。

蘭が乱れた髪を直しながらそこに立っていた。

「良かつた、蘭ーぞ、マイクやり直して、スタンバイして！」

何だか蘭の様子がいつもと違つたが、開演まで残り一五分ほどしかなく、園子は慌てて蘭を目行く担当の所へ行かせた。

やがて、幕が上がり、劇が始まった。

多少の練習のかいがあつてか、新一の口調も先程より滑らかだった。

仮面はそのままだつたが。

そしていよいよ、一番の見せ場のシーン。

王子がパーティー会場で見つけた、姫の声を使った魔女に求婚をしきける場面。

『君があの時の姫君…！？ようやく会えた！その声、間違いない！私の気持ちを受け取ってくれるなら、あの時口ずさんでいた曲を、どうかもう一度歌つてはくれないだろ？』

魔女役の志保が妖しく笑つた。

見るものをゾシとさせのような、冷たい微笑みだった。

「あれは…素よね？」

思わず園子は漏らした。

再び姫の心の声が響く。

『違います、王子様！あの方は私ではありません。でもなぜ、あの方は私の声をしているの？このままでは、私の気持ちが届く前に、私は泡となり、消えてしまつ…』

「…蘭？」

舞台袖でそつと見守っていたクラスメイト達が、蘭の様子に気付いた。

「」
蘭は、絶望のあまり泣き崩れる演技をするはずだった。

しかし、彼女はつかつかと新一に歩み寄っていく。

「何やる『』？」

蘭は新一の前までくると、立ち止まつた。

だが何も起きない。

観客達が騒ぎ出した。

「い、一日幕下うとうか？」

戸惑ったクラスメイトの一人が言つたが、園子が制した。

「待つて！…もう少し、このまま」

蘭はまだ新一を睨みつけていた。

すると、蘭の手が少し動いた。

皆が息を飲んで見守る中、舞台上でパンとこつ音が響いた。

蘭が新一の頬を叩いたのだ。

「ら、蘭、何やつてんの?」

「こんなの台本にないよ」

「工藤くん大丈夫?」

女子たちからそんな声が上がったが、男子達は面白そつと見ていく。

『あなたの愛はそんなものでしたか、王子さま。例え声は同じでも、その方は偽物。本物と偽物の区別もつかぬのですか』

声は出ない設定のはずの姫が話している。

会場が混乱に陥った。

『に、偽物?ビリ?』この意味でしょうか?

新一はどうやら展開につけていけていないらしく、田を泳がせながら必死に言葉を考えている。

「誰か、ペン貸して!」

園子は紙を手に取ると、その上に何かを書き、それを舞台上に向かって見せた。

『いきなり人の頬をぶつなんて、野蛮な娘です』こと。こんな娘は放つておいて、私達だけでお話をしませんか、王子様?』

志保は自分の声でさづり言つた。

当然、今までの志保の声は、あらかじめ録音しておいたはずの蘭の声。

『や、君… 今の声は、一体何だ？ 君は、私を救ってくれた、あの姫君ではないのか！？』

『な…こ、この小娘！ お前のせいで、せつかくの呪文が台無しだわ…』

『…』

これらはすべて、台本には載っていない。

「どうなつてんの…？」

クラスメイト達は困惑したように園子を見た。

「私が指示したの。このまま続けて！ って」

「でも、もう滅茶苦茶だよ？」

「大丈夫よ…」

舞台では、蘭抜きでの演技が続いている。

『どうやら、この娘の愛が大きすぎるが故、私の呪術もきかなかつたのね…。仕方ないわ。今回は私が諦めましょ…』

志保は黒いマントを翻し、舞台を降りた。

『結局、君が私が探していた姫君だったのか…それに気付かず、私はなんとこう愚かなことを……』

新一は蘭に向き直り、続けた。

『私は確かに、間違いを犯した。だが、私の願いはただ一つ。君の傍にいたい。私は君の傍にいられるだけで、十分に幸せなんだ』

台本にはなかつたセリフ。

蘭はしばらくの間、驚いたように新一を見ていた。

『…あなたは私といて、本当にお幸せなんでしょうか?』

蚊の鳴くような声で囁く。

『君がいなければ、私には幸せなどない。永遠に不幸なのだから。これは私の我儘だが、どうか私の傍に、いてほしい』

その後、二人がどうなつたかは誰も知らない。

すぐに幕が降り、ライトも消え、舞台は一人つきりの空間。

人魚は泡とならず、永遠に王子の傍にいることを、誓つたとさ。

めでたし、めでたし…。

…かな?

マー・メイド（後書き）

一週間ぶりの投稿！

駄文ですみません（汗）

リクエスト受付中

次回も見て下さい

光（前書き）

哀新

初です！

ねえ、工藤くん。

あなたが元の身体に戻つて、何年経つたのかしら？

私はもうすぐ、高校生よ。

吉田さんや、小嶋くん、田舎くんも一緒に。

あなたがいなくなつてからしばらくの間、落ち込んでいた彼らも、今ではすっかり大人になつてるわ。

みんな、変わつたのよね。

あなたも、探偵事務所の彼女と結婚して、幸せそうに暮らしているもの。

最近じゃ、あなたそつくりの顔をした小さな子が、あなたの家から元気よく出てくるのを見かけるわ。

変わつていなのは、私だけなのね……。

あなたがいなくなつた時から、私の時間は止まつたまま。

体だけ成長して、心は置いてきぼり。

そんなことを言つたら、あなたはきっと、笑うでしょうね。

月日が経つても変わることのない、あの笑顔で。

私が思わず素顔を見せそうになる、あのキラキラした表情で。

知つてた？工藤くん。

私、あなたが好きよ…。

今さら遅いでしょうけど、心の中で言つぐらう、許してくれるわよね？

組織を抜け出したばかりの頃、あなたは私の一筋の光だった。

あなたと一緒になら、彼らに立ち向かえるかもしれない、って。

それぐらい、私にとってあなたは大きな存在だった。

あなたと事件を解決できて、あなたに相棒と呼ばれて、私は幸せだつたわ。

初めて、人の役にたてた気がして。

真っ黒な過去が、浄化されていく気がして。

私はまだ、真っ白ではない。

あなたの愛しい人とは、真逆。

嫉妬してた。

明るさも優しさも、友だちも好きな人もすべて持っている彼女に。
でも、恨むことは、できなかつた。

お姉ちゃんに重ねていた、つてこともあるけれど、やつぱり一番は、
あなたが愛している人だから……。

彼女が素晴らしい人だということは、私だって知つてるわ。

でもあなたなら、『お前だつて、いいところあるぜ？』って言つてくれるかしら？

私がそれつて何？と聞いたり、せつと口籠るでしゃうナビ。

そんなあなたでも、私は好きなのよ。

他に好きな人ができたとしても、あなたのことは、ずっと忘れないわ。

もつ『江戸川コナン』は、もう存在しない。

それでも私は、あなたが好き。

姿は変わつても、あなたはあなた。

あなたは一生、私の光。

光（後書き）

相変わらずの意味不明っぷり、申しわけござりません^_^(ーー)^_<

次回もよろしくお願いします

リクエストも募集中！

ジエラシーパーナーク 2 (前書き)

星野由香里様リクエスト

平和

鏡の前に立つて、もう一度自分の姿を確認する。

今日のリボンはいつもと違い、淡いピンク色。

彼は気付くだらうか。

……いや、期待はしないでおいつ。

「これでええやろか……」

和葉は呟きながら、リボンの位置を確かめた。

今は何時だらう、時計に目を向けてた。

「ア、アカンーもつこんな時間ー！」

約束まで、残り三〇分しかない。

彼のことだ。

和葉が遅れてきたら、じいじとばかりに嫌味を言ひだらう。

結局、たいして見なおさじができるまま、家を飛び出した。

和葉は息をついた。

「ま…間にあつたわ…」

膝に手をつきながら辺りを見渡した。

しかし、彼はまだ着いていない。

携帯を開くと、そろそろ来てもおかしくない時間にはなつている。

「平次、何してんのや？…」

ためしに一度電話をかけてみる。

だが…出ない。

まさか、事件？

思わず手にグッと力が入ったが、堪えた。

この間のプロポーズ以来、全くと言つていいほど、彼はその話を持ち出さない。

それどころか、滅多に顔もあわせない。

そんな中テートに誘つてくれたのだから、これも少しの進歩なのか

もしれない。

今日はゆっくり待つとしようか。

和葉はベンチに腰を下ろすと、バッグの中から指輪を取り出した。

この前のデートで平次からもらつたものだ。

それを左手の薬指にはめてみて、思わず笑つた。

サイズがぶかぶかだ。

きっと何号かわからず、慌てて自分より二つ小さくものを買つたのだらう。

平次が一人で宝石店に入つて、指輪相手にこらめっこをしている様子を浮かべると、なんだか微笑ましくもある。

そうしていて、何分が経つただろう。

約束の時間は過ぎた。

今日はバイクだから、待ち合わせはこの公園であつていいはず。

なのに…遅い。

もう一度電話をしてみようかと思つていたが、公園の入口の方から、聞き覚えのある声がした。

「平次？」

立ち上がりつてその方を見た。

しかし、見ない方が良かつたのかもしれない。

彼女の顔に、青筋がたつた。

「うちらにもサインくれます?..」

「あつ、あたしにも!..」

「うちが先や!..」

「早いもん勝ちや!..」

キヤーキヤーと甲高い声をあげている女の子たちの中心に立つて、
間違いなく彼だった。

近づいてこても、ファンが多くて近づけない。

「お、押さんでもええや。ちょっと待つてや」

平次がへらへらとしながら、女の子たちを粗暴してくる。

それが更に、和葉の怒りを煽る。

やがてファンが消え、平次は和葉のもとへ来た。

「遅れすまんな!途中で捕まつてもうて

「知つとる」

「..な、なんか怒つとるんか?

「別に」

そう和葉が言つと、平次はホッとしたよつた顔になる。

「それやつたら、何ブスツとした顔してんねん？」

「せやねえ…。こんな色黒男に何分も待たされた拳句、他の女とへらへりしどつたことなんて…」

グイッと耳を引っ張つた。

平次が痛そうに顔をしかめた。

「全つ然、気になんかしてへんわ…！」

そう耳元で怒鳴ると、和葉は指輪をはずした。

「返す」

「は？か、和葉？」

「ほな、さいなら」

「ちひ、ちょお待てや…」

平次が何か騒いでいたが、和葉は氣にも留めず、ざすざすと公園を出ようとした。

「待てって言つてゐやろー…」

「知らん！」

「和葉！」

傍から見れば、滑稽な様子だらつ。

関西では有名な探偵が、女の子に振られて必死に追いかけてくる。

先ほどのファンが見ていれば、幻滅するかもしない。

だが、そんなことを考えていても、余計に苛々するだけだった。

和葉はスピードをあげた。

負けじと平次も足を速める。

「ついてくんな、アホ！」

「アホはどうちや、ボケ！」

「アンタにアホともボケとも言われたない！」

「知るかい、そんなん！」

めちゃくちゃにお互い怒鳴りあって、しまじには相手が何を言つて
るのかもわからなくなってきた。

「お前は昔からやうやかー理由は言わんでこきなりキレだしそつて

…」
「せつきの女の所、戻つたらええやひー。」

言つてこねつちに、言葉が素直になつてこのがわかる。

そう。ぶつかるべ。

素直な気持ちのまま。

「大体なあ、お前みたいなアホ、オレぐらしか相手にせえへんの
やから…」

「アンタみたいな男、あたじぐらしか面倒見きれへんのやから…」

.....

「すまん」
「じめん」

嫉妬と素直は、違うようで、実は近い。

好きじゃなければ、嫉妬はしない。

嫉妬しなければ、好きじゃない。

や、素直にならつ。

ありのままの姿で。

勇者？ 2（前書き）

須藤光輝再び！！

果たして、今回のお相手は？

「好きです！」

「遠慮しておくわ」

告白から振られるまでの時間、およそ一・三六秒。

記録更新！

…と、いけないいけない！

「あ、あのう、オレのビニがそんなにダメ…」

「しつこい所かしら」

ガーン！

ダメージ + 2 000 ! !

「それじゃ、私帰るわ」

「えつ？み、富野？」

クールに告げてから背を向ける彼女を、光輝は未練たっぷりに見つめた。

これで何度もになるだろ？

謎の美人転校生に一目惚れをし、以来こうしてアタックを続けるも、全く靡いてくれない。

それどころか、いつも冷たく振られるばかり。

まさか…これが所謂、シンデレカ！？

「なるほど…」

一人納得していると、後ろから肩をポンと叩かれた。

「うわっ！？」

「何がなるほどだよ？」

「兄貴！」

新一は頬をピクリと痙攣させた。

「誰が兄貴だよ」

「いいじやないすか。オレ、弟子つすからー！」

光輝は満面の笑みで答える。

「んなの許可した覚えはねーよ

「それより兄貴！確かに、あの転校生と仲良かつたんですよね？」

話を聞いていない光輝に、新一は少し青筋をたてた。

「富野のことか？」

「はい！富野志保です！」

目を輝かせる光輝。

しかし反対に、新一は呆れた顔を向けてきた。

「お前… 富野に惚れんのか?」

「あつ。ばれました?」

光輝は締りのない表情を見せた。

「アイツはやめとけ。おまえの手には負えねえよ」

「どういう意味すか?」

「…ま、頑張れよ」

「ちょっと兄貴いーアドバイスくださいよー!」

だが、新一は何も言わずにその場を離れた。

しばらくの間、光輝はきょとんとした田での方を見つめていた。

放課後、光輝はとぼとぼと帰路についていた。

工藤新一の彼女、毛利蘭に惚れていた時は、まだ良かつたかもしれない。

彼氏がいるし、自分を振った理由がはっきりとわかつていた。

しかし、富野志保の場合はどうだらう。

彼女には恋人はいないはず。

あれだけの美貌の持ち主で、なぜ作らないのだろうか。

そして、いないのなら、なぜ自分を振ったのか！？

「だあーっつー…わっかんねえ！」

光輝は苛々としながら、髪を梳しゃ�풀고 싶었다。

二つの間にか口まで戻られ、近くの家から美味しい匂いが漂つて来た。

晩飯なんだろ…。

やつと思つた途端、腹が鳴つた。

光輝の家までは、まだ二十分はかかる。

それまでにもつか…。

「あれ？須藤くん？」

今日はずつりから声をかけられる」とがやうに感じた。

光輝は再び、飛び上がった。

「そ、そんなにびっくりした…？」

「も、毛利か…」

蘭は少し傷ついたような顔をした。

「こや、そういうわけじやねえんだけど…」

「そう?…ならよかつた」

蘭は「コラ」と笑う。

「」の笑顔に、数週間前の自分は夢中だった。

しかし今は…。

「はあ…」

「どうしたの？」

「なあ。毛利も確か、富野と仲良かつたよな？」

「う、うん…」

光輝は藁にもすがる思いで、蘭の手を掴んだ。

「オレ、どうしてそんなに富野に嫌われんだー!?」

「え?」

「オレってそんなダメな男なのか…」

蘭は、急に落ち込みだした光輝を、戸惑った顔で見つめた。

「…須藤くん。今日、新一の家来る?」

「 いつ ただつ きまーす！」

「 現金な奴…」

新一の嫌味っぽい言葉も気にせずに、光輝は田の前にある蘭の手料理をがつがつと食べはじめた。

「うつめーー！」

「ありがとう」

蘭は嬉しそうに笑った。

新一は面白くなさそうに、自分も料理を口に運ぶ。

「兄貴は幸せもんっすね！いつもこんな飯食つてんだから」

「や、そつか？」

そう言わると、新一もつい頬を緩ませた。

「うんうん。羨ましいっすね。オレみたいな凡人には、夢のまた夢……」

光輝の話を遮り、チャイムの音が鳴った。

「客つすか？」

「私出るね。二人とも食べてて」

蘭が立ち上がり、玄関へと向かう。

「お邪魔するわ……」

その声に、光輝は素早い反応を見せた。

「富野！？」

志保はスプーンを持つたままの光輝の姿を見ると、眉をひそめた。

「あなた、何やつてるの？」

「飯食つてる！」

光輝は思わず幸運に、大声をあげた。

「てか、お前こそ何やつてんだよ？」

「あら。来ちゃ悪い？」

新一の問いかけに、志保はツンとすまして言った。

「そうは言つてねえだろ」

「さあ。どうかしら」

光輝は呆気にとられて、一人のやりとりを見つめていた。

よく一緒にいるのは見かけていたが、まさか学校外でも会っていたとは…。

「あのう、兄貴。宮野とは一体…」

「何だ。」近所つすか！

恐る恐る聞いてみると、新一はぶつきらぼうに、隣人とだけ答えた。

光輝はパツと明るくなり、笑い声をあげる。

「で、何の用だよ？」

「博士が何か実験をやつてるから出ってきたのよ。巻き沿いは「めんだから」

博士？実験？

何だかよくわからないが、これは所謂、奇跡の偶然…！

「そ、それなら、オレとどつか遊びに行こうぜ！近くにカラオケあるし、良かつたら兄貴たちも！ね？」

「バス」

勇者の精一杯の誘いは、あっさりと断られた。

「誰かさんの歌声を間近でマイク付きで聞かされるんだつたら、博士の実験を手伝つた方がましよ」

「おい、誰のことだよ？」

「あなた以外に誰かいるのかしら？」

「…」

新一と志保のやつとりを、光輝はほんやつと見つめていた。

志保の瞳の色が、いつもと違つていて、光輝は気付いた。

あれはどこかで見たことがある。

そう…。

いつも自分が、志保に対して向けている瞳だ。

「それじゃ、志保さんも夕食どう？まだだつたりの話だけど…」

「ありがとう。 いただくわ」

まさか、彼女が…。

光輝は上目遣いで、新一と志保を交互に見た。

「オレって、いつも兄貴には敵わないんだな……」

ボソッと呟く。

「あん？なんか言つたか？」

「や……何でもないっす」

いきなり暗くなつた光輝を、新一は気味悪そうに見た。

「何だよ、急に……」

「オレ、もう帰ろつかな……」

光輝は肩を落として、工藤邸を出ようとした。

その時、隣の家から、ドカーン！という爆発音が聞こえてきた。

「博士……？」

志保が慌てて光輝を押しのけて、飛び出した。

新一と蘭がそれに続く。

慌てて光輝も追いかけた。

隣の家から、一人の白髪の老人が出てきた。

「博士！」

志保が駆け寄り、咳こむ老人の背中を撫でた。

「何やつてんのよ?」

「す、すまんのう、志保くん…。ちょっと、失敗したよ!」

『ひひやり、彼が三人の言ひ博士にし』。

「つたぐ。また変なもん作るの?」

「変なもんとは何じや。わしの最高傑作じやぞー!」

博士は兀つ面つと、よつといひじょ、と立ち上がる。

「またやり直しせねばならんの…」

「いい加減諦めなさいよ。しつこいわよ」

「しつこくても何でも、わしはこの発明で特許をとつて、大金持ちになつてやるんじや!」

三人が空きれた田をする中、博士は高笑いをした。

一方、光輝は田を輝かせていた。

そして、不意に博士の手を握った。

「な、なんじや、瓶は…」

「オレを弟子にして下をこー!」

また始まつた…。

「オレも諦めの悪いヤツになつて見せます!」

いや、十分になつてゐるが…。

「 よろしくお願ひします、兄貴！」

勇者はもはや、誰でもいいらしい。

P i n c h = L o v e (前書き)

星野由香里様リクエスト

大学生新蘭

「何よ、新一の馬鹿！」

「んだと！？」

「大つ嫌い！」

いきなりこんな出だしで恐縮である。

ただ、今はそつとしておいてほしい。

ここで何か口出ししようなものなら、この二人は余計に素直にならない。

とりあえず今は、陰から見守つておこう。

ほら、ここにも、そこにも、見て見ぬふりをする友人たちがちらほらと…。

大学のキャンパス内でこんな大喧嘩をできるカップルは、この二人ぐらいしかいないだろ？

関わると面倒だ。

そう言いたげな様子で皆そそくさと去つていいく。

そんな中、一人の少女が彼女に近づいた。

「蘭。終わった？」

「何よ園子」

「今日も派手にやったわね～」

「あの推理オタクが悪いのよー。」

蘭は不機嫌に答える。

「はーはー。それじゃ、今日は田那の」となされて、合コンでも行きましょーか

園子は蘭の肩に手を回すと、ニヤッと笑う。

「何でそつなるのよ」

「いじじゃない。たまには自由になんなきや

「…京極さんは？」

蘭に聞かれると、園子は言葉に詰まつた様子でうつむいた。

「だつて最近連絡くれないんだもん…ちよつとべらこ不安にさせな
きやダメよ」

どうやら、お互に恋人とはうまくこつてないらしい。

「ひつなつたゞ、合コンでいい男と写真撮って、それ送りつけてしましょーよー！」

「はあ！？なんで私まで…」

「それ見たら新一くんだった…“ああ、オレが悪かった。蘭、今すぐ帰つてくれ！”って言つてしまふ」「い、言わないと思つたけど…」

とこつわけで…無理やり、蘭は合コンに参加させられる」ととなつ

た。

無論、蘭だった。

ここに仏頂面の少女が一人。

強制的に合コンへ連れてこられた挙句、自分の向かいにいるのは…。

「おー」

「…話しかけないで」

蘭は新一から顔を逸らす。

「怒つてんのか？」

「べつについで」

新一はため息をついた。

「つーか、こんな所で何やつてんだよ」

「それはこっちのセリフよ！私と喧嘩したから、可愛い女の子とお近づきになろうともしたわけ？」

「なわけねえだろ！」

「じゃあんたこそ何でこんな所にいるのよ…」

「お、オレは無理矢理…」

新一の歯切れが悪くなる。

「わついいわよー。」

つい怒鳴つて、田の前のグラスを煽つた。

「おー。そこそこいい飲みっぷりー。」

「いいねえ。飲める女の子つて」

男子達が蘭を見て、拍手を送つてこる。

しかし、蘭は無反応で手をあげ、おかわり!と叫んだ。

「う、蘭。それぐらいに…」

「うねれーーほつといて!」

えー…。

危険な匂いがあるので、いい加減私も帰りたいのですが…。

え?

ダメ?

…仕方ない。

あつといつ間に、蘭の前には空きのグラスが三本、四本…。

ベベけ蘭、ここに誕生!

…と、つい遊んでしまった。

申し訳ない。

「う、らーん。大丈夫?」

園子が心配そうに声をかけたが、蘭は気にせず新しいのを注文している。

「の、飲みすぎだつて」

「今日はとにかく飲むのーあらしのじとはほつといれー」

田律も回つていない。

…危険だ。

非常に危険だ。

私も逃げたい。

しかし…

語り手として、それはできない！…！

「もう帰つた方がいいよ」

「何よ、はくじょーものオ～」

園子は新一に視線を向けた。

「…ほら、帰んぞ」

新一は蘭の腕をひいて立たせた。

だが、蘭はその手を振り払つた。

「新一のばーか！」

「今はそういうこと言つてる場合じや…」

「一緒になんか帰らないもん。新一なんか嫌いだもん

「…嫌いでも何でも、帰るんだよ」

そう言つと、新一は蘭の手を引っ張つてその場から去つていった。

さて、私も語り手として、追いかけねば。

「新一の推理オタクー！」
「へいへい」
「ホームズ馬鹿あ」
「…へいへい」
「推理馬鹿王子ー」
「……」

新一が黙ると、蘭は新一の頬をつねった。

「いてつ。何だよ？」
「やーい。ざまーみるー」

酒の所為か、蘭は大声で笑った。

すっかり子供のようになってしまっている。

酒なんか飲ますんじゃなかつた…。

新一が後悔していると、蘭が突然立ち止つた。

「私はまだ怒つてゐるからねー」

「わかりましたよ…すみません」

「心がこもつてなーい！」

「…」めんなさい」

新一が頭を下げると、蘭はまた大声で笑つた。

「ほんとに悪いと思つてんのかあ？」

「思つてます」

「じゃーねえ…」

蘭は急にいたずらっぽいよつた田口さん。

新一は嫌な予感がした。

「キスして？」

「…はあ…？」

「嫌なの？じゃあいいもーん」

「そ、そりゃねえつて」

とは言つものの、二三は人通りが多い。

「いやなきやダメか？」

「だめーー。」

周りを見回す。

しかし、やはり人が多く、こんな所では……。

「やっぱ新一なんか嫌い」

「ま、待て待て待て！」

新一は歩き出でうとする蘭を引き留める。

そのまま腕を引き寄せ……。

一瞬だけ唇を合わせた。

周囲にいた人々が、こちらを見た。

新一は顔を赤くさせたが、蘭はなぜか、苦しそうな表情。

「ら……蘭？」

「新一……」

ま、まだ何か気に入らないことでも……。

「な、何？」

「……吐きそり」

「えつ？」

とつあえず「」までにしておきましたが……。

Pincus = Love (後編)

今回はおふざけが過ぎました。

どうも、すみません(――)へ

感想、リクエスト、お待ちしております

B Y語り手 (*^-^*)

White Love (前書き)

本日はクリスマス！

新
蘭

十二月二十五日。

キリスト教徒が少ない日本でも、それは大切な日。特に、世の中の恋人にとつては…。

しかし、中には例外もいるようだ。

「ねえ新一。クリスマスなのに、事件？」

一人の少女が、お玉を片手に口を尖らせた。

「しゃーねえだろ。事件は年中無休で起きんだからよ

対して青年は、冷めた口調で返している。

「…プレゼントとかは？」

「あん？」

「ないわけ？私はちゃーんとあげたじゃない！」

「ああ…あの見た目が丸焦げのレモンパイな」

それを聞くと、蘭は頬を紅潮させた。

「何よ、人がせっかく作ったのに！新一の馬鹿！事件にさつさと行つちゃえー！」

「言われなくても行きますよ」

新一はわざと靴をはくと、玄関を出た。

蘭はしじまへ息を荒くしていたが、急にぺたつと座り込んだ。

「新一の馬鹿…」

一人で過ごす初めてのクリスマスになるはずだつた。

今日のために、これからケーキを焼く予定だつたのに。

それが結局は事件で潰れる。

しかも…あんなに素つ氣ない態度で…。

「 もひいわよ…新一なんか知らない…」

携帯を取り出すと、親友の電話番号を表示した。

「 いつなつたら今日は、ずっと遊び歩こいやる…

やけくな気持ちで電話をかけると、思てのほか彼女はすぐに出た。

『 はーい?』

「 あ、園子? 私」

『 どつしたのよ。今日は新一くんとおトーナじゃないの?』

園子がからかうように囁いてきたが、蘭は違つて大声を出した。

『 な、何よ。そんなに叫ぶことないでしょ…』

「「」、「」めん…」

『さつせーん。わたくしは喧嘩したな?』

「…まあ」

蘭は俯いた。

『気配を察したのか、園子は明るい声をかけてくる。

『で、何? 私に愚痴を聞けって?』

『そういうんじゃないんだけど…。ね、これから暇?』

蘭がたずねると、少し沈黙があつてから、園子は「めん」と言つた。

『久しぶりに真さんが帰つてくれるんだ。だから、今日は一日トーク
かな』

「そ…そつか。楽しんできてね」

『うん…。なんか、悪いね。今度遊びまつ』

本当に申し訳なさそうに言つて園子に、蘭は笑つた。

「いいよ別に。急に電話かけた私も悪いし。それじゃ、また今度ね」

そう言つてから、電話を切つた。

思わずため息が出てきた。

ケーキの材料、買ってきちゃつたつけ…。

無駄になっちゃつたな。

レモンパイは失敗するし、新一は帰つて来ないし。

最悪のクリスマス。

「新一の馬鹿…馬鹿馬鹿馬鹿…」

「…」が新一の家であるところとも忘れ、ひたすら馬鹿と言い続け
る。

それでも、気分は全くスッキリしない。

蘭はテーブルの上に置いてある、ケーキの材料を見た。

「うなつたら…一人で作つて、やけ食いしてやる!」

がたつと立ち上ると、蘭は材料を手にキッチンに立つた。

最初は生地づくり。

メレンゲを作りつと卵を割つたが、力を入れすぎて、白身と黄身が
混ざつてしまつた。

「あ…どうしよ。黄身はいつたら固まらないし」

仕方なく、もう一個新しいのを取り出しだが、またしても失敗。

それを繰り返していくうちに、段々とこらつこしていく。

「何なのよ何なのよ何なのよ…」

ついに十個目の卵もダメにした。

「私が悪いってわけ……」

拳にグツと力が入る。

気力がなくなってきて、蘭はふらふらと近くの椅子に腰かけた。

目線の先には、卵でぐちゃぐちゃになつたキッチン。

しかし、それを片づける氣にもなれない。

再びため息をつくと、テーブルに突っ伏した。

そして、そのまま眠りの世界へと落ちていった。

「おい…蘭、蘭！」

「ん…」

体を揺すぶられ、蘭は目を開けた。

「…」となところで寝てたら風邪ひくだろ」

新一はそのままひいて、自分のコートを着せた。

「あれ…二つの間に帰つてきてたの…？」

「今だよ。どつかの誰かが、クリスマスに一人で寂しがつてんじやねーかなと思つてよ」

皮肉っぽい言い方。

だが今の新一は、間違いなく蘭を心配している。

「じ、事件は…？」

「止づけてきた。でも、お前は片づけてねーみてえだな」

新一はキッチン眺めた。

「あ……」

思えば、キッチンはそのままだ。

「何だよ、『Jの卵』

ボウルにはいつた卵を見て、新一は呆れたよつて言つた。

「だ、だつて……」

「…ケーキか？」

「…うん」

蘭が頷くと、新一は苦笑した。

「珍しいな、お前がこんな失敗するなんてよ」

「それは新一が……」

「オレが？」

冷たくするから……。

「…ほりよ」

不意に、新一は俯く蘭の目の前に、一つの箱を差し出した。

「…なんど…だれつと思つたぜ。買つていて正解だな」「…ケーキ？」

白い箱には、確かにイチゴのたくさん載つたショートケーキ。

蘭は呆気にとられてそれを見つめた。

「買つててくれたの？」
「まあな」

新一は頬をかいた。

「あの…ありがとう」

小さい声で、蘭は囁いた。

新一には聞こえなかつたらしく、なんだよと聞き返した。

「な…何でもない」

「はあ？」

「元はといえば、新一のせいなんだもん

「かつわいくねー…」

「何よ！」

始まる口喧嘩。

だがそれは、二人にとつて仲直りの証拠。

お互に笑い合つと、よしと新一は言つた。

「それなら、乾杯でもすつか？」
「あ、ご馳走！作つてない」

蘭が言うと、新一はまた笑つた。

「だったら、買い物に行くか？一緒に」

「…うん！」

二人はぎゅっと手を握った。

外ではいつの間にやら、雪が降りはじめていた。

「ホワイトクリスマスね…」

「だな」

雪が降るほどの気温の中、大して寒さを感じない一人だった。

繋がれていた手は、何よりも暖かい。

White Love（後書き）

それでは皆様、メリークリスマス！

私はメレンゲ失敗しないようにしなくては…（←→）

羽根つき（前書き）

A Happy New Year ! ! !

新年最初のお話になります。

今日はどじの家でも盛り上がった様子が見て取れる。

それもそのはず。

今日、一月一日は、日本にどじでは最大のイベント。

「あけましておめでとう」「わくわく

元旦だ。

じじい藤郎でも、新年の挨拶が行われている。

「素敵な振り袖ね～」

「まあね～」

振り袖で派手目に着飾った母親を、少年は呆れた目で見ていた。

子供にどじでは、この新年最初の行事は、少々堅苦しいかもしだい。

「有希ちゃん、あけましておめでとう」

やがて、眼鏡をかけた女性が有希子のもとへ来た。

「おめでとう、英理」

「新一君もおめでとう」

新一はせつと母親の隣に隠れた。

有希子と英理は、互いに顔を見合せて笑った。

「新ちゃん、『挨拶ぐら』しなさい」

「...」
「ほむけむ」

新一はふつむつに返すと、そのまま父親の方へ行つた。

「じつも新一君は、私のことが苦手みたいね」

「『氣のせこ』よ、あひと」

有希子は笑いながら英理の肩を軽く叩いた。

すると、後ろからやはり振り袖を着た小さな女の子が見えた。

「あひあ、蘭ちゃん、あけましておめでと!」
可愛らしい振り袖ね

蘭は「」と笑つて、「おめでと!」と言つた。

「蘭ちゃんはしつかりしてゐね~。うちの息子とは大違いね」

有希子はせつと笑つて、お年玉に夢中になつてこる新一に年玉をやつた。

新一もそれに氣づいたらしく、年玉を向けた。

蘭の姿に年玉を止めると、手を振つてきた。

「へーん。ひょっと来こよ」

蘭は英理を見上げた。

「こつてきなやー」

「新ちゃんをよひしへね」

蘭は嬉しかつに笑つと、新一の方へ走つていつた。

「新一、あけましておめでとう」

「おひ

新一が短く返すと、蘭はむつとした顔になる。

「うやんと挨拶はしなきゃダメでしょ？」

「…おめでと」

「それでよし」

蘭は満足気に言つた。

「それよつ、お年玉もいらねえぜ」

「うん。…あれ？新一、何、それ？」

蘭は新一が持つていたものに目を向けた。

「ああ、これか？」

新一は平べつたいたい板のよつなものを持って、一ヤッとした。

「羽子板つていうんだぜ。ほら、羽根つきのラケットみたいなもん

だ」

「へーべ

蘭はまじまじと羽子板を見た。

「やつてみるか?」

「うん!」

一人は庭に出て、羽根つきを楽しんでいた。

大人たちは穏やかな表情でそれを見守っている。

しかし、まだまだ子供。

遊びにも全力を尽くす。

「それー！」

蘭が勢いよく飛ばした羽根を、新一も負けじと返している。

だが、蘭は振り袖を着ている分、動きにくそうだった。

羽が地面に落ちると、蘭は悔しそうに顔を尖らせた。

それを見て、新一はけらけらと笑った。

「蘭、知つてつか？ 羽根つきでミスをしたら、顔に墨で落書きしてもいいんだぜ？」

「えーっ？」

蘭は不服そうに顔をしかめたが、大人しく新一に墨を塗られていた。

やがて、新一の顔はもとのままに対し、蘭は真っ黒という悲惨な結果…。

「そろそろ終わりにしようぜ」

「やだ！ 新一に勝つまでやるー！」

駄々っ子のようになつぱつと、再び羽子板を構えた。

新一は呆れたよつこため息をつくと、もう一度羽根を打った。

しかし…

「あーーー！」

「え？」

蘭が何やら後ろを指差して声をあげた。

傍にいた全員がそちらを向く。

その隙に…新一の足もとに、羽根がことッと落ちてきた。

「あ…」

「やつたーーー！」

「お、おい、卑怯だろ、今のー！」

新一は無邪気に喜ぶ蘭に怒鳴つたが、蘭は屈託のない笑顔を浮かべている。

「負けは負けでしょ。はい、座つて」

蘭は無理矢理新一を椅子に座らせると、嬉々とした表情で筆を持った。

抵抗もできないまま、新一はジッとしていると、大人たちがクスクス笑っているのが見えた。

「蘭、お前何書いて……」
「でーきた！」

蘭はさつと新一に鏡を渡した。

嫌な予感を抱きながらも、新一はそれを覗いた。

表情が凍りつく。

新一の顔には、可愛らしい文字で『ホームズおたく』と書かれていた。

蘭はそれを見て笑い転げている。

やがて、大人達までもが笑いだすと、新一は顔を真っ赤にさせた。

そして現在：。

「いつくよ～」

「らーん。足使つてもいいかー？」

「ダメに決まつてんでしょ！」

二人きりの静かな工藤邸に、鮮やかな色の羽根が宙を舞つた。

そして今年も…

「あー…！」

「え？」

ことつと地面上に羽根が落ちる。

「やーい、ひつかつたー！」

「だから卑怯だろ！」

「毎年引っ掛かる方が悪いのよー！」

蘭は笑いながら、今年も筆を持つ。

書きながら、クスクスと声を漏らす。

「何書いてんだよ？」

「…内緒！」

蘭はいたずらう子のよつな皿をした。

「気になんだる。鏡寄こせつて…」
「だーめ！」

ちなみに今年書かれていた文字は…

『好き』

の一文字だったりする。

羽根つき（後書き）

皆さま、あけましておめでとうござります

新年早々、駄文を読んで下さり、ありがとうございました(*^ーー^*)

今年もどうぞ、コナン大好き娘として、その小説をよろしくお願
いします^__^

勇者？ 3（前書き）

光輝ちゃんが好きすぎる今日この頃（笑）

須藤光輝は途方に暮れていた。

彼は今やつも、女の子に振られたばかりだ。

もつとも、これで三十六回田のひとではあるが。

さすが勇者。

それでもまだ諦めない。

光輝が一人でとぼとぼと歩いていると、後ろから突然声がかかる。

「あの、ひょっと道をお聞きしたいんやけど」

光輝が振り返ると、そこには長い髪をリボンでポニー・テールにまとめた、少女の姿。

「は、はい！なんすか？」

「毛利探偵事務所つてどいやろか？」

関西風の訛りのある言葉で、彼女はたずねてきた。

「東京の道はややこじゅうてな、道に迷つてしまつて……」

そういう彼女は、少し恥ずかしそうに笑つている。

「そ、そりなんですか！いやあ、大丈夫ですよ。オレが責任もつてご案内しますから！」

「ほんまっ・おおきに」

懲りるところ」とを知らぬ勇者。

また新たな恋を発見した様子。

光輝は「デレデレしながらも、少女の隣に立つて、道案内を始めた。

「「「」」」を右に曲がって…」一つの皿の角を左に。んでもって、それから

…」

光輝の言葉に、一つ一つ頷く彼女が、なんとも可愛らしい。

「助かったわ。おおきにな」

「あの、一人つすか？」

道を聞き終えて彼女が立ち去るつとすると、光輝は呼びとめた。

「ほんまは連れがあつたんやけど、ちょっと別のところ行つてしまひな…。先にあたしは、そこにいかなアカンのや」

「それなら、オレが一緒に行く！」

光輝がノリノリで告げると、彼女は不思議そつない目をした。

「ええの？ わざわざ反対方向に回つて…」

「いひつて。オレ、遠回りが好きな男だからーそれとも、行つちやダメかな？」

「あんたがええなら…」

彼女は名前を、遠山和葉と名乗った。

幼馴染と共に東京の友達の家をたずねたが、途中でその幼馴染とは別行動になつてしまつたらしい。

「ほんま腹立つ！ 戻つてきたら、ただじやおかへんで」

「まあまあ、良いじやん。おかげでオレらが会えたんだし」

「あんた、面白い人やね」

和葉はクスクスと笑つた。

その後も話を続けていたが、和葉の口から出でくるのは、ほとんどが幼馴染のことだった。

「仲良いんだね、その幼馴染と」

光輝が何気なく言つと、和葉は頬を赤らめた。

「それはその… 小さい頃からずっと一緒に、自然とな」
「ふうん」

光輝はふと、この間まで惚れていたある少女を思い浮かべた。

確か彼女の彼氏も、幼馴染だつたよくな…。

「あ、こりや、こりー！」

急に和葉は大声を出した。

いつの間にか、毛利探偵事務所の前まで來ていたらしい。

「それじゃ、ここまでで。氣いつけてな」

「あ、ああ、うん。じゃあね」

名残惜しい氣もするが、光輝は和葉に手を振った。

しかし、ここで恋の女神が微笑んだ。

「あれっ、須藤君？」

聞き覚えのある声に、光輝は驚いて振り返った。

「蘭ちゃん！久しぶりやね」

「いらっしゃい、和葉ちゃん。服部君は？」

蘭は和葉との再会に顔をほほめさせた。

反対に和葉の表情が険しくなる。

「あの推理ドーアホなら、駅の近くでひつたくり犯追いかけてったわ
「や、やう。じゃあきっと新一と同じ事件ね」

蘭は苦笑してから、光輝に目を向けた。

「でも須藤君どうしたの？こんな所にいるなんて

「あ、お、オレは…」

和葉は目を丸くさせた。

「一人知り合いなん?」

「うん。同じ学校だから」

「へえ。偶然つてあるもんやね。わざ道迷つてたら、ここまで案内してくれたんよ」

思わぬ偶然に、二人はキャッキャと笑い合つ。

「須藤君も上がつてく?」これからみんなでお夕飯なんだ

「いいのか!?」

光輝が夕飯の言葉に飛びつく。

「もちろん。大勢の方が楽しいし。ね、和葉ちゃん
『せやね。あたしもわつきのお礼せなアカンし』

そう言われると、光輝は緩んだ頬を更に緩ませた。

「オレは別に、当然のこととしたまでだからさ」

とりあえず上がつて、と蘭に言われ、光輝は和葉と共に探偵事務所に上がり込む。

「おつちゃんおるん?」

「いるけど、今は事務所よ」

「ほな、挨拶してくるわ。先にいっどつて」

そう言つと、和葉は事務所の方のドアを開けた。

「じゃ、私達家の方に行つてよつか」

「あ、ああ」

階段を上る蘭の後ろ姿を見つめながら、光輝はたずねた。

「なあ、毛利。和葉ちゃんのタイプってどんな奴?」「え?」

蘭は驚いた様子で振り返った。

「須藤君、今度は和葉ちゃんなの?」

「今度つてなんだよ。オレは全ての恋に真剣なんだぞー。」

燃えた田で語る光輝に、蘭は多少引いたようだが、笑顔はまだ辛うじてあった。

「でも和葉ちゃんは無理だと想ひなあ

「何で?」

「だって、和葉ちゃんは……」

少し言いにくそうに口ごもる蘭。

そこへ、事務所のドアから和葉が出てくる。

「おっしゃん寝とるわ。なんぼ起いじても起きひん」

呆れたよつこ首を横に振る。

「そ、そつか…あとでわづかへとか

蘭は再び苦笑すると、家のドアを開ける。

光輝にとつて、女性の家に入ることは久しぶりだ。

たつたこれだけで緊張している。

「新一達遅いなあ…」

「まだ犯人追つかけとんのかな」

その会話に、光輝は反応した。

「えつ？ 兄貴来るのか？」

「あ、兄貴…？」

和葉がきょとんとすると、蘭が色々あつてね、と囁いた。

しかし、名探偵といつものは遅く登場するもの…。

二十分、三十分と経つても、なかなか来る気配がない。

蘭と和葉の顔に、徐々に苛立ちの色が見えはじめる。

その中で光輝一人が、ややハイテンションで喋っていた。

やがて、和葉がしびれを切らして携帯を取り出したところ、チャイムが鳴った。

「おつ、兄貴か？」

光輝が身を乗り出す。

「ちょっと行ってくるね」

そつと蘭の表情も嬉しそうだった。

しばらくすると、蘭のほかに、一人の青年の声が聞こえてきた。

一人が新一であることはわかる。

しかし、もう一人には聞き覚えがなく、関西訛りがあつた。

まさか…

「平次！あんた遅すぎるで！」

「じゃかあしい！！オレやのうて、工藤が遅いんや！」

蘭と新一の後ろから現れた、色黒の肌に野球帽をかぶった青年。

その青年は、着いて早々、和葉と口論を始めた。

「お前、何してんだよ…」

「兄貴、お疲れさんです」

新一がうんざり顔で光輝を見ると、光輝はふざけて警礼をした。

「何でお前がここにいんだよ」

「運命のいたずらってヤツですかね」

光輝の返事に、いまいちよくわからないという表情をしている新一。

蘭がこそっと耳元で何かを囁いた。

「なるほどな…」

「何がつすか？」

「何でもねえよ」

口論が一通り終わると、色黒の青年、平次がようやく光輝に気付いた。

「見掛けん顔やな。誰やつたつけ?」

「オレは須藤光輝! 工藤兄貴の一番弟子です!」

平次は怪訝な顔になると、新一を見た。

新一は声には出でずに、放つておけと言つた。

だが、ここで和葉が、いらぬ言葉を放つてしまつた。

「須藤君はな、さつきあたしをここまで案内してくれたんよ」

平次の眉間に皺が寄つた。

「ほお、案内な…そりあおきに」

「ど、どつも」

「んで、どつなんや?」

「は?」

「せやから…」

平次の顔がズイツと光輝に近寄る。

「アイツに手を出してないんかつて聞いたんねん」

「あ、アイツ…?」

「あそこで間抜け面しながら、馬の尻尾ふつとる女の」ことや

和葉を指差しつつ、小声でたずねる。

「や、オレはそんなことは……」

「…ホンマやろな、それ」

「も、もちろん」

光輝が何度も頷くと、平次はようやく光輝から離れた。

「あ、兄貴、あの人一体…」

「氣をつける。アイツ自分じゃわかつてねえけど、やきもちだけは半端じやねえから」

新一が呆れた目で平次を見ていた。

「毛利…まさか、和葉ちゃんは無理つていうのはヤ…」

「あの二人、この間から付き合いはじめたらしくて…」

蘭の言葉に、光輝はがっくりと肩を落とす。

探偵に関しては、なぜか運がないらしい。

だが、光輝はふと顔をあげた。

「決めた！」

そう大声をあげると、光輝は大股で平次に近付いた。

「な、なんや」

平次がたじろいでいると、光輝は平次の手をガシッと掴んだ。

「オレ、あなたの弟子になります！」

「…まあ！？何言つとんねん？」

平次が混乱したように怒鳴る。

新一と蘭は顔を見合わせて、また始まつた、と呟いた。

「オレも探偵になつてもたいんです！」

そう言つ光輝は、やや半泣き。

「まずオレ、田サロ行つてやつてきます！」

「アホ！オレの色黒はじつちやん譲りや！」

勇者はまず、形から入るタイプらしい。

勇者？ 3（後書き）

何故か最近、光輝ちゃんが好きだつたりします（笑）

何度も同じことを繰り返しても決して諦めぬ勇者、光輝。

私は奴に、幸福を与えない（^ w ^）

感想・評価、そしてリクエストもお待ちしています

The magical!-! (前書き)

星野由香里様リクエスト

快青です。

女の子にとって、クローゼットは戦場だ。

どんなに素敵なお洋服がさげられていても、すぐに床に山ができる、しまいに服の山で遭難…。

今まさに、青子もそんな状況だった。

これにしようか、それともこれ、いやいや、そっちの方が…。

そういうじていううちに、セーターやカーディガンやらワンピースやらジーンズやらで、あつという間に部屋が埋め尽くされた。

それでも、青子はクローゼットに更に手を伸ばす。

奥の方を引っかきまわして、大量の服を降り出すと、一つ一つを鏡の前で確認。

周りは嵐が通過しているかのような状態にもかかわらず、青子の表情は明るい。

明日は待ちに待つたデートだ。

どんな格好をしていいのか。

考えるだけで、ワクワクしていく。

思わず鼻歌を歌つてゐると、それに合わせたかのよつて元携帯の着メロが鳴つた。

画面に表示された名前を見て、青子はびきつとした。

たつた今考えていた人からのメール。

なんだろ?。

慌ただしく携帯を操作して、メールを開いた。

そこには、絵文字も何もない素つ氣ない文章でこう書かれていた。

『悪い。明日行けなくなつた 快斗』

この冷たいメールに、いきなりのキャンセル。

ついムッとしてメールを睨むが、まさかメールが謝つてくれるわけでもあるまい。

ベッドの上に携帯を放り出し、ため息をついた。

「明日は青子の誕生日なのに…」

高校最後の誕生日。

去年の誕生日の倍も楽しませてやるつて言つたくせに。

快斗の嘘つき。

思えば、最近の快斗はゞいが冷たかった。

学校にいても、あまり田舎を呑わせてくれないし。

帰りも一人でさつと帰ることが多くなった。

それよりも何よりも、マジックの練習量がうんと増えた。

マジシャンになりたいといつ夢は立派だが、ここまで熱心だと、少し妬けてしまう。

マジックに嫉妬なんておかしいかもしれないが、そつ思つてしまつぐらー、今の快斗はそっちに夢中だった。

「いいもん。また恵子達に祝つてもうつもん」

一人つぶやきながら、青子は部屋を見渡した。

すっかり荒れた様子に、再びため息をついた。

去年と同じよつこ、青子の家に友だちが集まり、誕生日パーティーが始まった。

友だちはそれなりに盛り上がっているものの、青子の顔はどこか暗い。

「青子? どうした?」

恵子が不安になつてたずねたが、青子はすぐに笑顔になつて、何でもないよと言つた。

しかし、いつものような満面の笑みではない。

すると、友だちが呑気に言つた。

「今年も来なかつたね、快斗君」

「うん。楽しみにしてたんだけどなあ、マジック

「ちょっと!」

一人が注意すると、友だちはそろつて会話を止めた。

「さ、気にしないでよ。バカいどがいなくたつて、青子はこの通り元気だし…」

青子は気まずい雰囲気を自分のせいと感じたのか、両手を振つて明るさをアピールした。

「でも青子、快斗君と出かける約束してたんでしょ？」

「…うん」

「どうしちゃったんだろうね。ここんとこ、ずっとマジックの練習ばかりやってるみたいだし」

全員が押し黙る。

長い沈黙の後、青子はポツッと漏らした。

「快斗、青子に飽きちゃったのかもね」

「なんで？」

「だって、最近ほんとに冷たいし…。もしかして、他に好きな人でも…」

そいつ言いかけた青子を遮るようにして、外で大きな物音がした。

「なつ、何？」

驚いて立ち上がり、カーテンを開けた。

すると、信じられないような光景が目に飛び込んできた。

「わあ…」

「綺麗…」

「さつすが快斗君！」

「何よ。しつかり愛されてんじゃない」

友達が口々に言つたが、青子は答えない。

田の前の光景を、呆氣ことられて見つめている。

やがて、その田に涙が溜まつてきた。

「わっ、あ、青子。どうした？」

「何でもない……大丈夫」

そう言つてから涙を拭つ。

その間も、外ではイルミネーションがちかちかと光つている。

ビルといづビルに、言葉が記されていたからだ。

『Happy Birthday Aoko』

連なるビルを利用した、光のマジックだった。

「す、いね……」

言葉も失うほどどの美しさに、皆が見惚れていると、不意に部屋の電気が消えた。

「て、停電？」

慌ててこると、すぐ近くで聞きなれた声がした。

「シローはこれからだぜ」

驚く暇もなく、部屋が一瞬で明るくなつた。

しかし、電気がついたのではない。

部屋の中で、何十本もの蠅燭に火が灯つたのだ。

もちろん、つい先程までそんなものはなかつたにもかかわらず。

「快斗……？」

そつと呼びかけると、すぐ隣からポンと肩を叩かれた。

「誕生日おめでとう、青子」

振り向くと、そこにはいたずらう子のような顔をして笑つてゐる、愛しのマジシャンの姿。

「な、なんで……」

「約束したひ。去年の倍も楽しませてやるつて

やつ言つと、快斗は腰中に籠し持つていたものを差し出した。

「これ、やめる

青子は手を伸ばし、それを受け取つた。

「何? これ」

「あとのお楽しみ」

快斗は面白やうに笑つた。

そして、青子の髪を軽く撫でた。

快斗がいる。

当たり前だけど、そう思った。

青子は知らず知らずのうちに、元の笑顔になっていた。

「にしても、よくこんな大掛かりなマジックできたねえ

恵子が呆れ口調で言つと、他の友達も頷いた。

「そりゃそうだろ。オレのマジックショーなんだからな」

快斗は答えてから、小さな声で言つた。

「それに、今回は相当、練習もしたしな」

青子はそうだったのかと呟いた。

今さらながら、マジックの練習に妬いていた自分が恥ずかしい。

あれは全部、自分のためだったのに。

その後も、パーティーは明るい雰囲気で進んだ。

もちろん、快斗のプレゼントの中身が、びっくり箱だったことをぞいての話だが…。

The magical!-! (後書き)

やきもちとのリクエストでしたが……つまく表現できず(Ｔ＿Ｔ)

こんなうそですが、これからも頑張り、よろしくお願ひいたします^_^(ーー)^\n

感想・評価、リクエストお待ちしています(@^_^)ノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3831x/>

夜空

2012年1月14日22時52分発行